

# Reprint of Komyo Banashi (Volume3 Part1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江本, 裕[編] メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5716">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5716</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 『功名咄』五(下巻ノ上)

江 本 裕 編

## ことわりがき

紙幅の都合上、今稿以後、冒頭の『功名咄』概略説明と凡例を省略する。中巻の下までには記しているため、必要な際には前号までを参照されたい。なお、翻刻するにあたっての底本は東京大学史料編纂所・押小路文庫が所蔵する『功名咄』(三巻六冊)である。併せて金沢大学附属図書館・北条文庫所蔵本、大洲市立図書館・矢野玄道文庫所蔵本を参照している。異同がある場合には各咄の後に、(金)(大)の略号で示した。最後の「檜原咄」は下ノ下巻まで繋がっているが、便宜すべてを今号に収めた。

今稿の初稿も井高美妃(本学大学院修士課程修了)が作成し、それを江本が校閲した。従って最終的な文責は江本にあることを銘記しておく。

## 功名咄下巻ノ上目録

- 一 秀忠公御噂
- 一 深見咄
- 一 片岡備前咄
- 一 稲川咄

『功名咄』五(下巻ノ上)

- 一 秋山咄
- 一 野村咄
- 一 松村咄
- 一 川島卜平咄
- 一 水野谷小貫咄
- 一 大内治内咄
- 一 黒田甲州咄
- 一 板倉家咄
- 一 竹中咄
- 一 檜原咄
- 一 尾置咄
- 一 赤羽咄
- 一 小熊兎角咄
- 一 菅如閑咄
- 一 安達六兵衛咄
- 一 灰方道休咄
- 一 原 甚右衛門咄
- 一 中川中村咄
- 一 大久保縁組咄

## 功名咄

草毫

一 摂州大坂御帰陣以後、蜷川山城守殿ヲ被召出ケルト也。然ルニ、此山城守殿 大將軍秀忠公御前へ御目見ニ被罷出ケルニ、上意有ケルハ、「扱々山城守久シヒ。其方ハ最早余程ノ年ニテ有ヘキト思シニ、扱々達者ニ有ケル哉。今ガ能年盛也。天下ノ重宝カナ」ト上意也。然ルニ、御近習ノ若輩ナル者、是ヲ聞テ一円ニ合テン

不行ケレハ、不審ニ思ヒ、朋小姓ニ、「今ノ上意ヲハ聞ケルヤ、七十余才ニ成ケル山城守ヲ今カ年盛也。天下ノ重宝カナト上意ナリ。各ニハ如何合テン仕給フカ」ト問ニ、一人トシテ此道理ヲ「合テン也」ト云者ナシ。彼者、左有ハ「有功人ニ問テ見シ」トテ、老功ノ武士ニ、「此上意ハ如何ナル儀ソ。我々合点不行マ、聞マホシキ」由ヲ問ニ、彼老功ノ武士ノ云ク、「山城守七十余才ニナリケレトモ、毫氣モナク行歩ハ猶以達者ナリ。當時山城守程ノ老功ノ武士、世ニ希也。然ル間、山城守ニ達者業ノ普請土突サセント云ニハ非ス。明日カ日叛逆ノ者モ有ハ、カノ山城守ヲ大将トシテ被遣タランニハ、アツハレ天下ノ重宝ナル者カナト有御底意ニテ有ヘシ」ト云ヘハ、何モ信服仕タリト云々。誠ニ天下ヲ被知召御身ノ上ハ、凡下ノ思寄所ニハ非サレトモ、去ハ結城秀康公ト此大将軍秀忠公ト御面殿ノ内、「何方エカ天下ヲ御讓有ヘキ」ト権現様ニモ御思案有テ、老中ヘモ切々評シ合給シガ「秀康公戦国ノ大将ニ成給ヒテハ秀忠公ニ増リ給フ所有トモ、静謐ノ世ニハ尖ニテ悪カラシク又秀忠公ハ戦国ノ大将ニ成給ヒテハ秀康公ヨリ劣給フ所モ有トモ、静謐ノ世ニハ有徳ニテ善カラシ」トノ評議ニテ、天下ヲ秀忠公ヘ被為成御讓タリト也。誠ナルカナ此御一言、山城守カ身ニシテハ、大國ヲ給ヒシヨリハ増リテ有ガタキト思フヘシ。去ハ、兵法ニモ、「香飼ノ下ニ有懸魚、重恩ノ下ニ有死夫」ト云リ。凡下ノ武士モ朋友ノ交、又ハ、敵相ニテモ人ニ惡シト被思ニハ損失多シ。但シ、覺云ハトテ人ニ媚諂コトニハ非ス。義ニ通シ和有ト云コト也。去ハ、人ニ愛憐ノ心有レハ、人又我ヲ親ムコトハ常之法也。又、謀略ニテ敵ニ腹ヲ立サセテ、其怨ヲ打ント思フハ、格別ノコトナリ。去ハ、「君子ハ和シテ不流」ト云也。

注 この咄は、金沢大学北条文庫本は冒頭部が底本と異なる。

一 堀田上野介殿、奉諫言、下総国佐倉へ引込給ヒ、家中ノ頭タツタ

ル者共ヲ召集テ、被仰出ケルハ、「近年、松平伊豆守カ仕置ニ依テ、天下ノ万民コトノク及困窮侍ルニ依テ、吾一卷ノ諫言ヲ献上ス。然トモ、當時伊豆守カ威勢強ニ依テ、誰カ諫言ヲ奉テモ、彼者ヲ恐テ不達上聞ト見タリ。故ニ、今度吾籠城シテ奉諫言時ハ、其意趣ヲ不達上聞コトナラス。親加賀守カ志ヲ繼テ捨身、天下ノ安穩ヲ思フ所也。各ニモ此旨ヲ含テ、吾ニ志有ハ、諸共ニ被致籠城侍レ」ト也。其時、家来ノ面々一言ノ返答ヲ申者ナシ。然ル所ニ、深見縫殿助ト云テ、佐倉ノ町奉行役ヲ相勤ケル者、末座ヨリ罷出申上ケルハ、「只今ノ御意ノ趣、最至極ニ侍レトモ、又追テ御思量モ可有之コト也。天下ハ露頭不仕以前ニ、先、江戸へ被為成御登、能々被加御思案、重テノ儀ニ被成侍レカシ」ト申上ケル。其時上野介殿宣ケルハ、「去ハ、此コト不達上聞シテ、却文<sup>①</sup>我思所僻事ト成テ、天下へ弓引ヌル無道ノ者ニ被取成、江戸ニ置タル妻子從類等迄串張付ニ被上トモ、少モ不可恨。思切タル儀ナリ」ト被仰ケル。其時縫殿助、「此上ハトカクヲ可申上非ス。何籠城ノ御支度侍レ」ト云テ立ヌトカヤ。然ル所ニ、於江戸天下ノ老中、「此コト如何有ヘキ」ト評議有ケルニ、伊豆守殿宣ケルハ、「何モ如何被思召侍ルソ。善惡トモニトカク氣違ノ取沙汰ニ被遊侍ラハ、上ノ御為ニ可然様ニ存侍ルカ、何モニハ如何被思召侍ルソ。唯今善惡ノ取沙汰有之侍ラハ、結句御子息ノ為ニモ惡カルヘシ」ト被申ケレハ、何モ老中上野介殿ト親キ人々モ有ト云ヘトモ、皆此義ニ同シテ、上野介殿御舍弟ト御目付一人、佐倉へ被遣、「其方コト佐倉ニ在テハ対天下有憚儀也。先舍弟ノ美濃守領分、下野ノ那須へ赴給テ言上仕給ハ、可宣」ト被云遣ケレハ、此道理ニスカサレテ上野介殿、「左有ハ那須へ行テ言上セシ」ト云テ、出給ケルニ、最前諫言シタリケル深見縫殿助、上野介殿御駕ニ取付テ、「是ハ扱、如何仕タル儀ニテ侍ルソ。今ハ早何方ヘモ不被成御越所也。城ヲ枕ト仕給カシ。最前申上侍ルハ、爰ニテコソ侍レ。以後、御後悔侍レトモ、却り侍ラシ者ヲ」ト、

達テ留ケルト也。然ルニ上野介殿宣ケルハ、「去ハコソ爰ニ居テハ対天下悪シキ道理有。美濃守領分、那須へ越侍ル。ヤガテ吉左右可申越」ト云テ出給フ。縫殿助ハ跡ニテ涙ヲ流セシト云々。誠ニ、縫殿助力諫言、義也。信也。智也。勇也。忠也。鹿忽ニ物ヲ不敗、又一度其コトヲ詞ニ出シ、身ニ行テハ善惡トモニ無悔。是ソ誠ノ大丈夫心トハ云ヘケレ。又上野介殿、一旦ハ潔シト云トモ、後道ノ思詰ナクシテ惡シ。其故ハ、其後、那須ヨリ信州飯田ニ配流シ脇坂中務少輔殿（此中務殿、那須美濃守殿、兩人共ニ上野介殿舎弟也。脇坂家、那須家為養子ト云リ）へ御預リ、又数年ヲヘテ若州小浜ノ城主酒井修理大夫殿へ御預有シニ、忍テ拔出（延宝六年春ノ比、京都・伊勢・大和辺迄須礼仕經廻リケルカ、天下へ漏聞、修理大夫殿へハ閉門被仰付、上野介殿ヲハ阿波ノ徳島蜂須賀家へ配流仕テ、キビシク警固仕ケルト云リ。此為躰ニ依テ、最前奉諫言給シコト、血氣ニシテ真実ニハ非スト被思侍ル。去ハ、「初ヲ善トスル者ハ有トモ、終ヲ善トスル者ハ非ス」ト、古ヨリ伝侍ルモ最ニコソ。

①文↓テ（大・金）。

一 元龜・天正ノ比、片岡備前ト云シ者ハ、元來ハ宇都宮ノ幕下、小宅①三左エ門ト云人ノ与力ニテ、常州坂戸ノ城ニ在。然ルニ、親三左エ門ハ死去有テ、二代目ノ三左エ門七才ノ時、真壁道無、俄ニ出馬有テ、坂戸ノ城ヲ攻給ヒシニ、城主三左エ門七才ニ成ケレハ、後室其比二十七才ニ成給ヒケルカ、糸毛ノ鎧ヲ着シ、髪ヲ乱シ、白キ絹ニテ鉢巻シテ薙刀ノ鞘ヲ脱シ、自身城内ヲ走廻テ狭間ヲ配、軍勢ヲ配、早鐘ヲ鳴シ、狼煙ヲ揚タリケレハ、近辺ノ味方茂岡辺ノ者トモ我先ニト馳來ル。宇都宮ヨリモ後攻ヲセント議セラレケル。去ハ、此真壁殿モ元來ハ宇都宮ノ幕下ナリ。然トモ、少故有テ俄ニ出馬有シト也。然ルニ、片岡備前モ籠城ソ②イタリシガ、近辺ノ味方、次第馳近付躰ニ見ケレハ、城ノ追手先長峯ト云山ノ尾崎へ武者四、五拾騎張出シ、備前真先ニ進ミケル所ニ、

『功名咄』五（下卷ノ上）

真壁者ニ潮縫殿ト云者責上リケル所、備前躰ニテ突落ス。縫殿、谷ニ留テ云ヤウ「流石ノ躰カ不通ト云ハ可有レシ左。俄ノコトニテ番躰ヲ以テ出タリ」ト云。坂戸五郎兵衛ト云者攻上ル。其時、備前云ヤウ「真壁殿モ少シノ義理合ニテコソ御出馬也。上ハ御一体ナレハ、爰ハ真実ノ勝負ヲ仕ル所ニアラス。最早是ヨリ御帰リ候へ。重テノ証拠ニハ、片岡備前ニ躰ヲ為置タト被仰侍レ」トテ、躰ヲ捨、手ヲ披テカ、リケレハ、五郎兵衛流石被突モセスシテ引シ。是偏ニ戰ヲ延テ近辺ノ味方ヲ引付ント云謀略ナリトカヤ。如此ノ内ニ宇都宮ノ軍勢モ近付寄ケレハ、真壁殿長峯ヨリ五丁討③ノ田切有ケル向ノ山ニ本陣ヲ被置、軍勢ヲ引上給フ所ニ、備前、宇都宮其外味方ノ馳近付ヲ見澄シテ、五拾騎計ノ味方ヲ引具シ、真先ニ進テ真壁勢ノ跡ヲ慕テ追カケルニ、矢野但馬ト云テ強弓ノ得名タル者也ケルカ、土俵鞞ヲ付弓持テ、馬上ニテ引退ケルカ、跡ヨリ備前「遁スマシ」ト追懸ケレハ、但馬ヲヨリ放シ、「心得タリ」ト云テ弓ニ矢ヲハゲツ、口引テカケレハ、備前又云ヤウ「扱々見コトナル哉、武者姿。真壁殿モ少シノ義理合ニ依テコソ御出馬アル上ハ御一躰ナレハ爰ハ実ノ勝負スル所ニ非ス。御退候へ」ト云テ不懸ケレハ、但馬モ馬ニ乗テ引退ヌ。扱、真壁勢ハ一間計ナル井溝ノ有ケルヲ前ニ、当テヨリ數テ備タル所ニ、備前諸人ニ勝テ一騎ノリカケ下立テ、カノ井ミゾヲ飛越、真壁武者ト躰ヲハシ、ト合テ「角コソ躰ヲバスル者ナレ」ト云テ、跡へ飛越ス所ヲ、真壁勢ノ内ヨリ鉄炮ヲ指出シ、一、三間ニテ放ケレハ、備前カ膀ニ当テ倒レケル。其時僕從走着テ、馬ニ抱乗テ引退シニ依テ、首ヲハ不被捕ト云ヘリ。扱、宇都宮殿モ出馬有テ対陳也。然ルニ、結城晴朝ニモ御出有テ、使武者櫛ノ齒ヲ引カ如ク双方へ被遣、和睦仕給テ、真壁、宇都宮へ帰陣有シト云リ。其後於真壁、潮縫殿、坂戸五五④郎兵衛、長峯ノ先陣ヲ争ケルニ依テ、備前カ許へ問ニ被越ケルニ、備前カ返答ニハ、「縫殿ハ右ノ谷ヨリ登リ、五郎兵衛ハ左ノ谷ヨリトタンニ登ケル故、何ヲ先、何ヲ後

ト申儀ハ不侍」ト云シト也。

去ハ、兩人先後ヲ争ケルニ、双方ヲ不捨云分ト可知。先後ハ不云シテ分明也。是ヲ其比坂戸乱ト云シトカヤ。

①「小宅」に「ヲヤケ」とルビ(大・金)。②ソ↓「~~メ~~」(シテ)(大・金)。③三本とも「討」だが「計」となるべきか。④三本とも「五五」だが衍字か。

一 奥州ノ政宗、白川ニ出張シテ関東ヲ掠トランコトヲ欲ス故、関東ノ諸將云合テ、白川ノ境赤館ト云所ニ出向テ対陳累日也。余リ長陳成シニ依テ、在所ヨリ軍兵ヲ入替ケルニ、片岡備前、戦ノ期近付ケルコトヲ推察シテ腹中ヲ下シ、腹痛シケルコトヲ謀言シテ、「跡ニ残テ今一兩日モ養生シテ在所ニ可帰」ト云テ、逗留セシ内ニ、五日モ不過戦有シニ依テ、此戦ニ合ケルト云リ。

一 其所ハ不覚、或夜敵城へ押寄ル時、此片岡備前城ノ門際ニ有テ、「思懸タ、其夜ハ鉄ノ扉モタマラヌ」ト云テ、小歌ヲ謡タリ。其時、矢狭間ヨリ鎧ニテ突タリケレハ、備前カワダカミノハツレヨリ肩先ニ当リ、備前云ヤウ、「黒心鎧ニテ不通」ト云ハ、城内ノ兵、「左モ可有番鎧チヤ程ニ」ト答タリ。此段以後、兩人ノ証拠ニ成シトカヤ。此問答両度有シコト少シハ不審ニモ思フコトナレトモ、又両度問答コトニモ非ス。当世トテモ可云挨拶也。

一 此片岡備前、後ニ浅野采女正殿へ被召出、足輕大将ニ被成ケル。然ルニ、大坂冬御陳ノ秋、相州小田原城主、大久保相摸守殿、流人ニ被仰付シ時、浅野采女正殿・水野谷伊勢守殿、兩人小田原ノ城請取ニ越給ケルニ、其比采女正殿領ハ下野ノ茂岡ト常陸ノ真壁也シニ、俄ニ軍勢ヲ被召ケルニ、黄昏ニ及テ飛脚到来シヲ①上ヲ下ヘト騒キケルニ、此備前、暮六半時ニ馬ヲ引セ、具足櫃ヲ持セ、其身ハ平生着物ノ上ニ木綿小袖ヲ一ツ打カケ、下人共ニハ錢二百

文ツ、腰ニ付サセテ、同役ノ足輕大将ノ許へ「イサ御同道申サン」ト云テ来ケル。此者ハ若キ者ニテ「其ツ、ラエハ此羽織ヲ入ヨ。此綴蘿エハ此小袖ヲイレヨ②是ヨ」ト云内ニ、早備前カ打立ケルニ依テ、此者、「扱々、無念ナル儀也。常々如何ニ巧者也トモ、何コトニモ負マシキト思ヒケル者ヲ」ト云テ、涙ヲ流セシト云リ。然ルニ、此備前、以後ニ語リケルハ、「武士タル者ノ妻女ヲ持ハ何コトソ。先ニテ入ヘキ物ヲバ跡ヨリ見計テ越ト云付置タリシ。自然妻女ノ見計悪布シテ不越、先ニテコトカク迄ヨ」ト云シトカヤ。能心得ヘキ也。

①ヲ↓テ(大・金)。②ヲ↓ヨ(大・金)。

一 此片岡備前、大坂夏御陳天王寺表一戦ニ、一番ニ馬ヲ入ケル所ヲ、敵ニ鎧ニテ勝ヲ被突ケレトモ、不討シテ引退ケル。以後ニ、多川九左衛門ト云者ト一番鎧ノ争有ケル時、九左衛門ガ云ヤウ、「去レハ備前ハ馬上ニテ有シマ、鎧トハ被云マシ。我ハ折立テ仕タル間、我等カ一番鎧ニテ侍」ト云ハ、備前カ云ヤウ、「去レハ、関東ニテハ一番ニ馬ヲ入テ鎧ヲ合セルヨ一番鎧トハ申也。左様ノコトヲハ不知」ト云シトカヤ。扱、カノ鎧疵ニハ塩ヲ入テ、時々塩湯ニテ洗テ置シ間、見人、「何ソ膏藥ヲ付給フヤ」ト云ハ、「膏藥ヲ付ヌル時ハ、結句疵ワカヤギテ悪シ」ト云テ、其マ、遊行ト云リ。夫ヲ近ク見タル人ノ語シ。此備前ハ、コトニ臨度毎ニ不塞手ト云コトナシ。毎度コトニ逢度ニ、少シ也共不蒙疵ト云コトナシト云リ。此外、高名トモ数多聞シカトモ、端々計ヲ聞シヲハ不書頭ト可知。

誠ニ、此片岡備前ハ、近国ニ得名兵也トイエリ。右坂戸乱ノ節、味方不統シテ不勢ノ時分ハ、堅守城不出、後攻ノ勢近付ヲ見テ城ヨリ討テ出、長峯ニ於テ潮縫殿ヲハ突倒シヌト云トモ、坂戸五郎兵衛ニハ降ヲ乞テ、実ノ勝負ヲハ不為。扱、加勢ノ兵參着シテ、真壁勢ヲ慕テ討テ出。然レトモ、此戦ノ根元ヲ察シテ実ノ勝負ヲ



ハ嫌シコト、眞壁勢ニ恐テツラ出シモ得不為ト被云マシト云心得、是ヲコソ仮粧軍ナト、ハ可申。又、於赤館、腹中氣ト謀言シテ逗留仕テ、其戦ニ逢シコト、智勇有驗也。無智戦ノ期ノ近付タルヲ不可知。無勇偽テ逗留セン。実ニ器量有兵ト云ヘシ。又、夜討ノ時、敵城ノ門ノ際ニテ小歌ヲ謡コト、夫程ニ生死ヲ離テ戦ヲ心易思フコト、扱々勇氣盛ナルナリ。常々剛強ナル働モ最也。大丈夫ノ心ナクハ不可成。当世ハ左様ノ場ナケレハ、心ヲ可<sup>たゆ</sup>様ヤウダニモナシ。誠ニ羨敷者也。又大坂表ニ於テ、手疵ニ塩ヲ込シコト、其手疵ニモ寄ヘケレトモ、是ヲ聞テハ又其心得モ可有コト也。又、小田原発向ノ時分、早速ニ打立ケルコト、最能心得也ト可知。去ハ、大儀ニハ不迷ト云トモ、小事ニ迷コトハ常ノ習也。此旨能々勸弁仕給へ。

一 右坂戸乱ノ発ケル濫觴ヲ尋ルニ、稲川ノ一家ヨリ、コト起ケルトカヤ。其故ハ、此稲川ノ一族、坂戸ノ城下近辺七、八ヶ村ヲ年来領シテ、宇都宮ノ家頼ナリ。然ルニ、其時分ヨリ数年以前、小田天南入道氏晴、武威盛ニシテ近境ヲ掠取テ、坂戸城ニハ信田掃部介ト云小田ノ家老ヲ被居置ケル故、稲川ノ一家ノ者トモ不成心宇都宮ヲ背テ小田ニ属シ、又然レトモ、先祖ヨリ数代ノ旧恩ヲ慕テ惣領ノ長子ヲハ宇都宮ヘ出シ、坂戸ノ城下茅原ト云所ニ居鋪構ヲ拵テ置ヌ。然ニ、小田殿次第ニ威勢強ク、関東ニ双肩者無。夫故、良モスレバ被押倒ツヘウ見ケル間、関東ノ諸將云合、越後謙信ヘ使者ヲ遣シ、「御馬ヲ被出、小田ヲ御退治被遊下侍ハ、何モ可属幕下」由、連署ノ誓紙ヲ以被申達。越後謙信ノ返事ニハ、「八幡出陳可申候」ト計、短冊ノ如ナ<sup>①</sup>紙ニ返事也。扱、彼使者ノ帰來ケルト一度ニ、越後勢早是エ見ヘ侍ル。去程ニ、押來リ給ヒケルト云リ。夫故、関東ノ大将達、此戦ニ不出合衆モ多ク有シトカヤ。是ヲ三王堂合戦トハ云シ。氏晴、此戦ニ打負テ、小身ニ成給ヒ、結城殿ヲ御頼有テ居給ヒケルト也。

『功名咄』五（下巻ノ上）

此戦ニ信田掃部介モ討死シケレハ、何ノコトモナク小宅三右エ門ハ、小栗ヨリ坂戸ノ城ヘ乗込シト也。此故ニ、稲川ノ一家ノ者トモ、流石又宇都宮エ帰參モ成カタクシ、眞壁道無エ勤仕スト云ヘリ。然ルニ、茅原ノ惣領モ二代目ニ成、此方祖父・親モ死シテケレハ、互ニ從弟ニ成ヌ。覺有所ニ、茅原ノ稲川、小宅三左エ門ヲ後楯ト成テ、稲川ノ一家ノ者共ヲ取倒シ、先祖ヨリノ領地ヲ一人シテ支配センコトヲ欲シ、良モスレバ稲川ノ一家ノ者共ヲ亡サンコトヲ謀テ、雜兵六百余ヲ催シ、茅原ノ館エ夜討仕ケルニ、堀深ク門ヲモ二重門ニ仕テ有シ故ニ、急ニ是ヲ破ントスレトモ不破、内ニハ早鐘ヲ鳴シケレハ、坂戸ノ城ニモ聞之、軍勢ヲ催シ、松明多ク襲來ル。此時、稲川太郎左エ門ト云者、門脇ニ付テ堀ヲ乘越ントセシ所ヲ、内ノスカシ門ヨリ鍵ヲ出シテ突落タリ。稲川土佐（其比若名ヲ藤二郎ト云シト云モノ其比十八才ニ成ケルカ、太郎左エ門ヲ捨テ、敵ニ首ヲ取ンモ口惜）ト云テ、「我堀ヘ飛入、下ヨリ可揚マ、上ニテ各引上給」トテ、則堀ヘ飛入、太郎左衛門ヲサシ揚ル。上ヨリ板戸五郎兵衛・高久織部ナト云者、替々手ヲサシ伸テ是ヲ引揚ントスレトモ、ユビサキ鎧ノ上帯ニ当ハスレトモ、手ニ不懸ケレハ不被引揚。又、五郎兵衛云ヤウ「我下ヨリ上ヲ見ン」トテ、土佐ヲ堀ヨリ上ラセ、五郎兵衛堀ヘ飛入テ上ル。去トモ、右ノ如クニテ不被捕ト云リ。

然ルニ、其内惣軍ハ次第ニ引トモ稲川越後ト云者、一人虎口ノ橋桁ヲ踏テ「敵出テ見ヨ。定テ声ヲハ聞覺ツラ」ト荒言吐テ、彼三人、太郎左エ門カ死骸ヲトランノトセシ内、踏留テ居タリケルトモ、終ニ不被捕。越後ハ聞ル武功ノ者ナレハ、敵恐テ不出カ、然トモ、其内ニ坂戸ノ城ヨリノ加勢モ次第ニ近付ケルマ、打捨テ引退ケル。敵跡ヨリ大勢ニテ追カケレトモ、四人ノ者トモ是ヲコトトモセズ、打連立テ引退ケル。扱、茅原ヨリ拾四、五町引退、野山ヲ越テ行処アリ。爰ニテ土佐跡ヨリ月影ニ見テ云ケルハ、「越後ハ勝ニ手負給フカ」ト云。其時、越後探テ見、「誠ニ、先程

橋際ニテ鏈ニテ被突タリトミヘタリ」ト云テヨリ、一足モ引コト不成シテ居タリ。残り三人ノ者トモ、何トゾ云ヘトモ、越後、「今ハガニモ一足モ不被引。各吾ヲ助給ハント仕給ハ、必定討死タルベシ。吾ヲ捨テ引退給」ト云トモ、三人ノ者トモ不退。「左有ハ幸ニ土佐殿居給フ上ハ不苦、我首ヲ揚テ引退給」ト再三云ケレトモ、土佐、「爰迄引退御手前ヲコ、ニ捨テ行ンモ無念ナル儀也。我成次第負テ可退」ト云テ、越後ヲ肩ニ引掛テ、夫ヨリ二拾四、五町退タリ。其時、高久織部、「是ヨリ我ヲノ替リ侍ルヘシ」ト云テ、越後ヲ肩ニ負テ二拾町計モ引退ヌ。又土佐モ負テ、右ノ茅原ヨリ二里半計真壁ノ方ニ、羽田村ト云所アリ。其庄屋ニ羽田將監ト云剛者アリ。此者二預ヲキ、三人ノ者トモハ、我屋敷都宮村ト云所ニ、其夜ニ立帰ケルト云リ。去ハ、「土佐カ若カリシ故ニ、脇ヨリ手負タリト云コト不覚也。脇ヨリシテ手負タリトハ不云者也。若者ハ聞覚給」ト、土佐老後ニ語リシト云リ。

是ヨリ弥茅原ノ稻川、同姓土佐カ一族ヲ亡サンコトヲ謀ケル故、土佐カ一族安座シガタクシテ真壁殿へ訴ケル。依之、俄ニ出馬有シト云々。

誠、此四人ノ者トモ剛強ナル者トモ云ヘシ。稻川越後、橋際ニテ手負タルヲ不知コト最左モ可有コト也。去ハ、当時火事・洪水ノ鬧いそがしき敷時分ハ、少シノ怪我ヲハ不覚コト常ノ習也。又心静ナル時ハ、栗ノ隱家いんがノ立タルヲモ能覚侍ルコトハ、誰々モ同コトナリ。

此旨思量仕給へ二此稻川・土佐、大坂御陳ノ時分ハ其齡五十八才ニテ有シガ、共常州真壁ヨリ出陳セシニ、乗馬・小荷駄ヲハ牽セナカラ、毎日五里六里ツ、步行ニテ遊行セント云佐タリ。誠ニ、常々如此不嗜戰日ニ至テ可勞コト勿論也。老功ノ心懸、最殊勝ト云ヘシ。吾子孫タラシ者、此旨了得仕給へ。

①ナ↓ナル(大・金)。

一 大坂御陳ノ刻、浅野采女正殿、天王寺表一戦ノ時、近習ノ者ニ秋山角左衛門〔此者甲州ノ秋山伯耆守曾孫也〕ト云者有。然ルニ、敵味方乱相

テ、采女正殿ノ前ヘモ余多討テカ、リケル所ヲ角左衛門敵一人突倒シ、采女正殿ニ向テ云ヤウ、「殿、御見在タカ」ト断ル。采女殿「アウ見タ。能仕タ」ト宣ヒケレハ、則首ヲ執シト云々。

誠、此角左衛門、心不動ノ武士ト云ヘシ。左様ノ時分ハ如何ニ弁舌能モノモ、好キ一言カ不云物也ト云伝侍ル。殊檀那二向テ覚云コト勇氣盛ニシテ、心不動驗也。以後ノ証拠ニモ、此外誰カアラシ。扱又、セハシキ場ニテハ、人ノ証拠ニ立コトハ悪シ。武士ノ不成者也。然トモ、又勝レテ働武士ハ、手前ノ持はたらき強ク刃ハヒトキ火疾ニ依テ、人ノ働ヲ可見隙ナシト云リ。左モ可有。此故ニ、人ノ証拠ニ立コトハ善コトト云ヘトモ、最上トハ云間敷カト思所ナリ。但、其所其品ニ依テ也。物奉行物頭ナトハ諸人ノ甲乙ヲ委細ニ見覚コト第一也。此所ヲ能々思量仕給へ。

一 寛永ノ比、関東ニ尾置兵ヲキ内ト云悪党者アリ。此者ハ数度押入、剛盜・辻切ナトセシニ依テ、式十七度迄首ノ座へ出タル程ノアヤフキ目ニ逢タルモノ也。夫故ニ、公儀ヨリ種々御穿鑿有シカトモ、アソココ、ニカクレ居テ、世上自緩ゆるカセニ成テ以後、水戸中納言殿エ三百石ノ所領ニテ被召出ケルト云リ。此者中比ハ、常州茨城郡中郡ト云所、中田十兵衛ト云者ノ宅ニカクレ居テケル。其比ノ物語ニ、「男タラン者、人ヲ討テ則切腹センナト云コト、大形腰抜ノ仕業也。人ヲ討テハ達者ニ退カタキ者也。善悪共ニ先立退テ、自然親兄弟ニモ御カ、リ有ハ、罷出テ切腹スル迄ヨ。人ヲ討テモ氣臆シテハ得立退コト不成シテ、可為切腹ナト云者ナリ。尋常ニ切腹ナト云ハ、若者ニハ不似合シテ悪シ。人ヲ討テハ随分達者ニ立退給へ」ト云々。

誠ニ、此兵内ハ剛強第一ノ者也。関東ノ風俗トシテ剛強ヲ好コトニ迷テ覚有剛賊ヲスルコトヲハ不為恥ト。依テ、剛盜・悪党ニ与スル者多シト云リ。右ノ物語最至極セリ。去ハ、氣幅有者ハ、生死ヲモ苦勞ニセスシテ迷コトナク人ヲ討テハ甲斐々シク立退者也。

然トモ、前廉ヨリ可立退ト覚語シテ討果モノハ、大形可立退所ノ心入強ニ依テ、心開シクシテ留ヲモ不指、半死半生ニ仕チラカシ立退ニ依テ、跡ニテ生返タル族多シ。此処ヲ能々分別仕給ヘ。去ハ、討果モノハ一途ニ勝負ヲ宗トシテ人ヲ討、留ヲサシテ以後ハ、又兵内カ云シ如ク甲斐々シク立退コト最ナリ。相手ヲ討テ一時生タラハ一時ノ勝、相手ヲウチテ二、三ヶ月生延タラハ、二、三ヶ月ノ勝チ、十年モ生延タランニハ、十年ノ勝歴然也。此所ヲ能々思量シ給ヘ。

一 元和ノ比ヲヒ、関東ニ野村弥助ト云悪党者アリ。此者、松下石見守殿下野国鳥山領シ給フ比、竊盜ノ者ニテ有シガ、近国ニ敵持ノ在シヲ金子ニテ被頼、五、六人行テネラヒケルニ、カノ者ハ親子三人ニテ在シカ、或夕暮ニ、親ハ台所ノ爐ノ端ニ、向ニハ小屏風ヲ立火ニ当テ在シニ、彼弥助シノビ入テ小屏風ノ陰ヲ便テ近々ト詰寄、爐ニ掛テ有シ茶釜ヲ切テ落シケルニ、釜ノ湯、灰ニカ、ツテ座中真黒闇ニ成ヌ。亭主、是ニ周章ル所ヲ切倒、又男子二人モ周章テ出ル所ヲ何ノ造作モナク同枕ニ雜伏ス。其時、諸人聞付テ馳ツキケレトモ、何国トモナク逐電仕ヌ。明ル朝、カノ討テ退ヌル足跡ヲミルニ、畠二三間ニ片足ツ、踏ツケタル足跡有。依之「大形余人ニハ有間敷、野村弥助ニテ可有」ト、諸人取沙汰仕ケルトカヤ。此コト已露顯シテ、石見守殿へ其旨被仰達ケルニ依テ、残ル四、五人ハ方々ニテ成敗有シカトモ、弥助一人ハ如何仕タリケン、何国トモ不知逐電仕タリ。石見守殿、種々御尋アレトモ、討給フコト不叶。依之弥助カ父、野村伯耆ト云者、召捕テ牢者ニ被仰付、「弥助力不罷出、伯耆ヲ可有成敗」由、札ニ書テ立給ヒケルニ、弥助是ヲ見テ添書ヲ仕テケルハ、「伯耆ヲ被成御成敗度ハ、可有御成敗。我等罷出コトハ不成。其故ハ、御心根ヲ能存テ候。噓我ヲノ罷出候モ、親ヲ御助ハ被成間敷。親子共ニ御成敗有テモ、御腹ハ居間敷ト存ル上ハ、我ヲ罷出ルコトハ仕間シ。又、

『功名咄』五（下巻ノ上）

伯耆ヲ被成御成敗タラハ、三十日ト申タケレトモ、御大名ノ儀ナレハ、左様ニハ成間敷歟。三年トハ延スマジ。敵ヲ取可侍俣、御イノチ危ク侍ル」ト書タリ。依之流石成敗モ成ス、却テ御用心有シトカヤ。松下殿ハ浅野采女正殿ト御入魂タルニ依テ、被成御頼、采女正殿家頼ノ内、其比関東ニテ数度ノコトニ馴タル武勇ノ譽有モノ、山口次兵衛・山崎三左エ門、籠番セシ猪之助、其外彼是六、七人討手ニ被遣ケルニ、下総ノ国古河ト云所ニテ彼弥助ニ風ト行逢タリ。素ヨリ皆知人也ケルマ、  
「扱々弥助久シヒ、何トカセシ」ナド云テケレハ、弥助モ「如何モ久シ。扱各ハ何方エカ行給フ」ト問ニ、「日光辺エ御用被仰付罷越ス」ト云エハ、弥助云ヤウ、「久シフリテ逢タルマ、酒ヲ可振舞。此方へ来ヨヤ」ト云テ、酒屋へ先へ立テ連テ、「皆入給エ」ト云テ、弥助ハ庭ノ白ニ腰ヲカケテ、巾着ヨリ一分判ヲ一ツ取出シ、「御方はテ何へモ酒ヲ振舞テ被下。皆昔語ツタ衆ダ」ト云テ投出シ、「我ハ少シ用所有。爰テ酒ヲ吞テ行給ヘ」ト云テ出ル。討手ノ者トモ、「平更久シクテ逢タルマ、先爰へ上リ咄セ」ト云ハ、弥助云ヤウ、「否、其方達カ吾ヲ討ニ来ハ合テン也。弥助ニハ不逢ト云テ帰給ヘ」ト云ハ、討手ノ者トモ、「平更左様ニテナシ。昔ヲ可語マ、爰へ来ヨ」ト云ハ、「其方タチガ弥助ヲ討コトハ成マシ。勿論六、七人ノ者トモカ一度ニ来ラハ、吾モ成間敷カ。然レトモ、吾ニ押ツ、ヒテ走コトハ其方達ハ成マジ。自然一人計来ルモノ有トモ、息ヲ切テ可走着。吾ハ何程走テモ息ヲ不切間、六人ヲハ六所ニ切倒シ、御無用シヤ」ト云ナガラ小足ニ歩ミ行ヲ、「平更左様ニテナナシ」ト云テ、跡ヨリ追々ニ行ケレハ、弥助、「先我ヲカ走ヲ見ブツセヨ」ト云テ走出ケルカ、鳥ノ飛ヨリモ早ク一息ニ五町計走テ、小塚ノ上ニ登テ扇ヲ揚テ招テ、「去ハ々重テ可逢」ト云テ、何国トモナク失ヌ。六、七人ノ者トモ、「此上ハ不及力、可討手段モナク成ヌ」ト云テ帰リヌトカヤ。

其後程ヲヘテ、笠間領内ニカクレイケルコロ、塙彦九郎ト云シモ



ノ、彼弥助ニヒソカニ対面シテ云ケルハ、「其方ハ伯耆ヲ御成敗有ハ、松下殿ヲ三十日トハ申タケレトモ、三年トハ不延可討ト云コト、余ニ口ヒロキ云分也。アナタハ大名ナレハ、如何シテ可討」ト云ハ、弥助云ヤフ、「我身ヲスツル程ナラハ、三十日トハ延スマシケレトモ、吾ハ左ハ不存。アノヨウナル大名ヲ討ニハ小腰指ヲ以テ仕タルカ、吉所ハ江戸ニテ正月三日ノ御謡初ノ夜、十月ノ亥ノコノ夜、登城仕給ハヌコトハ有間敷ケレハ、御玄関前エ紛入り、近々立寄、小腰指ニテ脇ノ下ヨリ突捨ニ突ヌキヲクトキハ、目計キロノトシテ倒ル者也。扱倒レ給ハ、目ヲ廻シ給フカナト周章騒内ニハ、一町モ二町モ立退スル間、別ノコトナシ」ト語りケルト云ヘリ。其後、此弥助傷寒ヲ煩ヒ病死仕ケルニ、石見守殿是ヲキ、給ヒケレトモ、猶モ覚束ナク思召ケン、使者ヲコシ給ヒテ病死ノ様子ヲ寺ニテ取ヲキタル躰迄ヨク御センサク有テ、以後二伯耆ヲハ成敗有シト云々。

誠ニ、此弥助ハ剛強ニシテ道ノ達者也。殊更智モ有ト見タリ。然レトモ、親ヨリシテ道ノ道タルコトヲシラス、不教ニ依テ一生ヲ空ク悪道ニヨチイルコト残多シ。惜哉、此者ハ智勇ト達者ト人ニ勝レタル徳三ツ有コトハ世ニ稀ナル男也。去ハ、此弥助ハ刀ヲ求テモ二尺三寸ヨリ長キヲハ自身スリ上テサシケルト也。此弥助カ如ク働ヲ好ムモノハ短キ刀ヲコノミ、実ニ勝負ヲスル者ハ長刀ヲ好ト見タリ。昔、関東ニ小太刀半七ト云兵法遣ノ在ケルカ、長キ<sup>①</sup>ヲ指ケルニ、或人問テ云、「小太刀遣ノ長刀ハ如何仕タルコトソ」ト云ハ、半七カ曰、「去ハ敵一人ニ逢テハ此クロカネ骨ノ扇ニテアヒシロフニ心安シ。然レトモ、敵多勢ニ逢時ハ、小太刀ニテ成カタシ。故ニ長刀ヲ指ヌル」ト語ケルト云リ。又軍術ノ心得ニモ、「甲斐ノ信玄ハ正兵ヲ好ハ多勢ヲ卒シテ戦、越後ノ謙信ハ奇変ヲコトトスレハ、毎度少勢ヲ卒シテ多勢ニ向フ」ト云リ。実ニ此弥助カ如クノ男ニ道ノ道タル道理ヲ教、邪智ヲ本智ハ引直シタランニハ、類鮮キ武士ナラン者ヲト残多シ。世ニ一芸アル男

スラ稀所也。去ハ、何ニテモ責テ一芸ヲハ人ニ勝タルコトヲ求マホシキ者也。此旨思量シ給ヘ。

①底本は「キ」の下一字分空白↓大・金は「刀」。

一 寛永・正保ノ比ヲヒ、浅野内匠頭殿工鷹ノ功者ナル由ニテ鷹匠ニ被召出ケル者ニ、赤羽十左エ門ト云者アリ。此者、元ハ那須一家衆ニ勤仕シテ在シ者也（或説ニ赤羽十左エ門、古主那須一家衆岡本宮内少殿伯父、岡本猪兵衛ト云人也シニ、宮内殿所領ノ内分地少シ拝領ニテ居給カ、宮内殿不行儀ニ有シカバ、数度諫言仕給ケレハ、是ヲ六ヶシクトヤ思ハレケン、被為討ケルニ、手下ニ一人切伏数人手ヲ負セ、唐紙障子ニ寄居給ヒケル所ヲ、大身ノ鑓ニテ障子コシニ突レケルヲ、ネシヨリテ手離劍ニ打給ヒケルガ、人ニハ不当ケルガ、疊ヲ打通シアユミノ板マテ通りケルト也。後ニハ、恐テ寄付モノナカリシカ、鑓ニテ唯中ヲ被突抜カレ給シ故、次第二弱リテ障子ニ寄給ナガラ倒給ヒシヲ見テ、以後ニ討シトカヤ。依之コソ宮内殿ニモ改易ニハ成給ヒシト云リ）。

然ルニ、彼主人大坂表ニ於テ組討ヲ仕給ヒケル所ニ、敵大勢ニテ助来リ、己ニ危ク見ヘシニ、右ノ十左エ門ト同傍輩ト兩人シテ敵大勢ヲ追払、難ナク奉為執首。依之其主人モ此兩人ノ働ヲ殊ノ外賞味仕給ヒケルト也。然ルニ、大坂落城以後、年ヲヘテ其主人病死仕給ヒケルニ、カノ兩人モ浪人ト成テ、十左エ門ハ鷹ヲ云立仕テ、内匠頭殿へ罷出タリケルガ、大坂陳ノ取沙汰ハ一円ニ不云シテ在シ。カク有所ニ右ノ傍輩、彼大坂陳ノ手柄ヲ云立仕テ、知行三百石ニテ出タリ。右ノ証拠人ニハ、「唯今浅野内匠頭殿ニ罷有、赤羽十左エ門ト申者、一所ニテ働侍ル間、御尋可被遣」由、一々書付ヲ以テ相濟ケルニ依テ、其書付ヲ則内匠頭殿へ被指越。此段必定ニテ侍ルヤ否ト也。其段、大石内蔵助ト云家老ヲ以テ御尋有ケルニ、「一々必定ニテ侍ル。少モ偽不侍」ト云。其時、内蔵助カ云ヤウ、「何トシテ其方ハ如此働有ナカラ、不為云立シテ居侍ルソ」ト云ハ、十左エ門カ云ヤウ、「男タランモノ主人ノ被討侍ルヲ何トシテ見捨テ逃侍ルベキソ。我ラハ其手カラトモ存不侍。カノ者ハ不恥シテ能申立ニハ仕侍ルモノ哉」ト、アサ笑テ居ケル

ト也。此段、内匠頭殿ニモ被聞召、其以後、何トナク二百石ノ所領ヲ給ヒシト云リ。此十左エ門カ物語ニ、「軍中ニ於テ鎧武者ヲハ先腰ノ辺ヲ鎧ツケルガ吉」ト云シト云々。

誠ニ、此十左衛門、勇猛ノ男ト云ヘシ。コノ者ノ如謂男ヲラン者、主人ノ大事ヲウチ忘テ可逃ヤウハナケレトモ、コトノ急ナルニ望テ心転倒シ、臆病ナルモノトモノ逃ル心ニ引立ラレ、不成心逃ル者モ多シト云リ。

伝聞甲斐ノ信玄ノ御舎弟、曲<sup>①</sup>既信繁ト申セシ人ハ、出陳ノ度コトニ「吾門前ニ大ナル石ノ有ケルニ向テ、願ハ吾今度屋形様ノ御大事ニ代テ討死スヘシ」ト云誓テ出陳シ給ヒシガ、終ニハ、如案信州川中島合戦ニ剛敵ト聞エシ越後ノ謙信ト戦、母衣ヲ台ニ揚ケ給ヒ、三丁計馬ノシサリヲノリ給ヒ、終ニ討死仕給シトカヤ。誠ニ三町計リ馬ノシサリヲノリ給ヒシコト、イカメシク聞エ侍ル者カナ。如此ノコトニ心ヲ付テ味エ給エ。又此信繁子息、曲既信連ヘ数ケ條ヲ為書置給ヒシ初ニモ、奉対屋形様尽未來不可有逆意ト為書給ヒシコト、実ニ其忠信ノ程ヲ推察シテ、我ラハ見度ゴトニ涙グミ侍ル。我子孫タラン者モ奉対主君不忠不義ノ振舞有ハ、吾亡魂ハ必十丈ノ鬼ト成テ、天罰ニ先達テ可執殺ト思所也。又、忠貞ノ志有ン者ニハ、我天命ト一ツニ可加守護コト勿論也。是程ニ心カケタランニハ何カハ主ノ御用ニモ立サランヤ。常々不心懸ニテハ見ナラヒト云テ、「コトノ急ナルニ臨テ臆病者ノ逃ルヲ見テ与風逃ル者也」ト云伝侍ル。

又、母衣ヲ台ニ揚ルト云ニハ、母衣武者ノ討死ト窮タル時、如此仕侍ルト也。其仕ヤウハ未得習。故ニ不書。常ニ武士ノ討死ト窮タル時、甲ノシノビノ緒ヲ切ルト云、同前ノ儀也ト云リ。又、軍陳ニテ鎧武者ヲハ先腰ノ辺ヲ鎧着ヌルコト吉シト云ンコト、最至極セリ。如何様ノ具足ニテモアレ腰グサリト云テ腰ヲクサリニテスル物ナレハ、能心得也。然レトモ、不心懸ナル武士ハ如此ノコトヲ聞テモ不聞。覺無詮コト也。此旨思量仕給ヘ。

①曲↓典（大）。六行あとの「曲」も同じ。

一 寛永ノ比ヲヒ、京極主膳正殿家来、松村半兵衛ト云モノアリ。然ルニ、此者私用ノコト有テ江戸ヨリ上方ヘ登リケルニ、半兵衛小身者ナレバ、一僕ヲモ不召連、昼夜ノ障モナク登リケルニ、相州戸塚ト藤沢トノ間ニテ小雨降ケル。夜ノクラサハクラシ。ヒタ物道ニ迷テ行先モ不見、心モ茫然敷カリケル。不審ニ思ヒ居敷テ先ヲスカメ見ルニ、何者トハ不知、白キ者ノチラ、ト躍ヤウニ見ヘケルヲ、半兵衛元来早業ニテ、居ナカラ一丈計ハ飛ケルマ、二尺一寸ノ孫六ノ大脇指ニテ抜ウチニ、手ゴタヘシテガツシト当ル。然ルニ、百千ノ燧<sup>ヒヤチ</sup>ヲ以テ火ヲウチ出スカ如シ。然レトモ、其跡形モナカリケレバ、半兵衛猶モ不審ニ思ヒ、其近辺ヲ尋ケレトモ、其行衛ナシ。前後ヲ忘キヤクスル程昏カリシモ、晴タル心地仕ケレバ、「扱ハ狐狸ノ我ヲタフラカシケルヨ」ト思テ、近辺ナル茶屋ニ立寄、「夜モ及深更ケレトモ、茶ヲ所望スヘキ」ト云テ入ヌ。然ルニ、亭主カ云ヤウ、「此方ニハ何コトソ被為逢タルカ。何トヤラン其気色違テ侍ル」ト云ハ、半兵衛云ヤウ、「此上ハ何ヲカ、クシ可侍」ト云テ、右ノ段々ヲ委細ニ物語仕ケレハ、亭主、「去レハコソ此比其アタリノ石仏ノ化テ遊行ト取沙汰シテ、夜ハ往来モ留リ侍ル。扱ハ疑モナク石仏ノ变化タルニ侍ルヘシ。少休給ハ、夜モ明侍ヘシ。迎ノ儀也。御穿鑿有テ御通アレカシ」ト云故ニ、少シ休足ノ内ニ夜ハ明ヌ。彼近辺ヲ見ケルニ、道ノ傍ナル石仏ヲ袈裟掛ニ切離テ有。諸人は見テ、奇異ノ思ヲ成ケルト云リ。夫ヨリシテ此石仏モ不化ト云ナラハセリ。此石仏ハ戸塚ト藤沢トノ間ニテ今ニアリ。諸人見物スル所也。其後、此孫六ノ脇指ヲハ躍仏ト云異名ヲ付テ秘藏セシニ、半兵衛ガ末期ニ及テ、「是ハ奇代ノ脇指也」ト云テ、主膳正殿ヘ遺物ニ献上セリ。其ノチ主膳正殿秘藏ノ兒小性ニ被遣ケルガ、其行末ヲ不知云々。此半兵衛、不忠儀ノ变化ニ逢ト云エトモ、心不動、得物ノ早業ヲ

以テ達本意也。去ハ、聖人ハ不語怪力乱神ト云トモ、是ハ又、其  
仏モ今ニ有テ諸人見分ノ前ナレハ、各別ノ儀ニモ有シカ。去ハ、  
此半兵衛、志剛強ニテ有シニ依テ、石ヲモ切ハリケルコトハ、奇  
妙ノ高名ト可云物欤。去ハコソ、「思ヒ入強キ時ハ石ニモ矢ノ立」  
ト昔ヨリ云伝侍ルハ不有偽ト思量仕給ヘ。此半兵衛モ石仏ト見テ  
キリタランニハ、刀ハ折碎ヘケレトモ、何トハ不知「変化ソ」ト  
心得テキリシ故ニ、刀モ不損ト思所也。コ、ヲ以テ「剛強ニ働者  
ニハ、刃モ不立、向フ敵弊死」ト云伝侍ル。又、半兵衛カ如ク  
「夜道ニ踏迷テ無詮方時ハ、ヨリ敷テ心ヲ静メタルカ吉」ト云伝  
侍ル。是口伝也。此旨能々了得仕給ヘ。

一 関ヶ原合戦以後、江戸ノ御城ニハ 秀忠公 御在城也。其比、  
塚原ト伝カ流諸国一巴カ弟子、湯浅小熊助・根岸兎角助ト云者、  
劍術ノ上手有シカ、兩人共ニ江戸中大勢弟子ヲ取立居タリシカ、  
如何仕タリケン、互ニ威ヲアラソイテ仕合ヲスルニ窮リヌ〔伝云、  
諸国一巴劍術修行ニ湯浅小熊助・根岸兎角助・石子泥之助、三人ノ弟子同行ス。一巴所勞甚敷及ニ  
十死一生ノ類。小熊助遂電シテ、武州江戸ニ出テ号ニ微塵流、大勢之執。弟子ニ震ニ威風。兎角助・  
泥之助ノ兩人、「小熊助、師恩ヲ忘テカ、ル行跡前代未聞ノ不義」ト憤テ、兩人、小熊助ヲ打、与  
ニ恥辱ヲニコトヲ欲ス。故ニ兎角助、江戸ニ出テ、小熊助カ族宿セシ近隣ニ借宅シテ、「兵法天下ニ」  
ト云額ヲ出ス故ニ、互ニ威ヲ争テ仕合ヲセシト云リ。泥之助ハ其比、鹿嶋大明神ニ百日參籠シテ、  
兩人シテ小熊助ヲ討テ達本望コトヲ祈ルト云リ。去ハ、後ニ小熊助ヲ討タルハ、此泥之助カ討タ  
リト云説モアリ〕。所ハ常盤橋ノ上、両方ニハ虎落ヲ結テ、互ニ両方ヨ  
リ一人ツ、出合スハスニ約諾シテ、秀忠公ニハ御門櫓ニ出御成テ  
御見物也。御近習・外様ハ不及甲<sup>①</sup>、江戸中ノ諸人見物セリ。扱、  
兩人木刀ヲ以テ出合ケルニ、小熊助ハ院二構、兎角助ハ清眼二持  
テ懸合ケル所ニ、兎角助、小熊助ヲ先ニ〔はた〕打チ、「マイツタ」  
ト云テ飛退ク。左足ニ橋ノ欄干ノ上ニトヒ上リケレバ、小熊助、  
「トツコヒ」ト云テ飛カ、ツテ、手ヲ以テ橋ヨリ下ヘ突落セハ、  
兎角助水ニ溺テ漸ハレ上リタル躰見苦敷コト無云計。故ニ、其鼻負々

ニ依テ、或ハ「兎角助ガ勝タリ」ト云モノアリ。或ハ「小熊助  
カ勝也。兎角助カ見苦サヨ」ナント取々様々ニ批判仕ケルトカ  
ヤ。秀忠公ニハ、「兵法ハ兎角助カ勝、相摸<sup>②</sup>ハ小熊カ勝也」  
ト 上意有シトカヤ。兎角助ハ、何ノトシヤクモ無、其夜上  
方ヘ登ケルト也。其跡ニテ鼻負々ニ取沙汰シテ、「兎角助負タル  
証拠ニハ夜逃仕タカ必定也」ナント云シトカヤ。其ノチ、小熊助  
ハ弥江戸中発向シテ、不殘弟子ニナリタルヤウニ時花ケルトカヤ。  
然ルニ、兎角助ハ是ヲ意根<sup>③</sup>ニ思テ、三年目ニ忍テ江戸ヘ下リケ  
ルニ、其日小熊助ハ加々爪民部少輔殿ニ兵法ノ稽古有テ居タリケ  
ルニ、兎角助黄昏ニ及テ、洪紙包ヲ一ツ背中ニ負テ民部少輔殿玄  
関ニ至テ、番ノ侍ヲ頼テ、「小熊助殿是ニ御入侍ル由掛御目度」  
由ヲ云入ケル<sup>④</sup>ハ、小熊助元來見事ナル男ナリシカ、撫付ニシテ  
縋子ノ袴ヲ着シ、「何心ナク小熊ニ逢度ト云者何者ソ」ト云テ出  
タルニ、兎角助右ノ洪紙包ヲハ傍ニヨロシヨキ、玄関ノ脇ヨリ  
「兎角助ガ意趣ハ覺タカ」ト一尺七寸ノ脇指ヲ以テ抜打ニ、小熊  
助ヲ袈裟掛ニ討離ス。其時、諸人周章騒テ出合間ニ、兎角助ハ直  
ニ伊達政宗ノ屋敷ヘ駈込タリ。跡ヨリ籙本ノ歴々大勢追カケテ、  
「兎角助、小熊助ヲ討テ走入タリ。御出シアレ」ト責ケレバ、「否、  
此屋敷ヘハ不參」トアラソヒチンシテケルニ、「是非々はヘ參タ  
ルガ必定也。左有ハサカシテ見シ」ト云バ、政宗ノ返答ニハ、  
「如何ニモサガサセ可申。乍去、居不侍ハ如何仕給フヘキ。妻子  
等ヲ置所迄サカシテ不居ハ、吉ハト云テ返シハ仕侍ル間敷。其  
合点ナラバサガシ給ヘ。サカサセ可申」ト宣ケル間、追手ノ面々  
一人逃、二人逃、過半逃去ケル。秀忠公、此段為及聞召、「何  
モサカシ侍ル儀ハ無用ニ仕リ帰ルベシ。政宗被云分モ其道理有」  
ト 上意有シニ依テ、諸人引返シケルト云々。  
誠ニ、兎角助カ先ヲ打タリト云トモ、無詮輕業仕タルニ依テ、一  
旦ハ見苦敷目ニ逢タリ。小熊助ハ先ヲハ被打ケレトモ、後道ヲ能  
詰タルニ依テ、対々ノ勝負ノ如ク成ヌト云ヘキ物カ。以後ニ、兎



角助力意恨ニセシハ怨讎ノ深故也。然トモ、是ハ又小熊ヲ不討不  
埒明ノ道理モ有ハ左モ有ヘシ。伊達政宗ノ返答モ最至極セリ。是  
等ハ能手本トモ云ヘキ物カ。去ハ、「何コトモ無手本コトハ仕カ  
タキモノ也」ト古ヨリ云伝ヘ侍ハ、万一走込ナト有時ハ、是ヲ手  
本ニ思出テ用御座在。

①甲↓申(大)。②↓撲(大)。③根↓恨(金)。④ル↓レ(大)。

一 寛永ノ比、関東二川島ト平ト云劍術ノ上手有シ。此者ハ塚原ト伝  
ガ家業ヲ継テ、則ト伝ガ孫聲ニテ有シトカヤ。此者、兵法執行ノ  
タメ諸国ヲ可廻志有。故ニ、彼妻女ニ此旨ヲ語テ、用意シテ首途  
仕ケル。晨燈ノ消ケルマ、ト平爐ノ際ニヨリ居テ火ヲ吹付ケル所  
ヲ、妻女後ヨリ木刀ヲ以テト平ガ首ヲ礮ト打ケル所ヲ、ト平、  
「是ハ何コトソ」ト云テ、混ト執ル。其時妻女、「自カラニテ侍ル」  
ト云ヘハ、「扱如何思テ打ケルソ。去レハ、我モ用心シテ金火箸  
ヲ襟ニ着テ居タレバコソ不痛」ト云ケレハ、其時妻女ガ云ヤウ、  
「去バトヨ、私ノ祖母ハト伝カ妻女ニテ有シガ、常ニ物語仕侍レ  
ハ、ト伝ハ妻女ニテ在シ我ニタニ油断ヲセス用心仕タリト被申シ。  
此方モ今度諸国兵法執行為トテ出給エハ、心元ナク思侍ル俛、若  
油断モ仕給フ哉ト打テ見侍ル。最早心元ナク思コトナシ」ト云テ、  
暇乞仕テ出シケルトカヤ。此ト平ハ常々油断ヲセスト云リ。去ハ、  
江戸ノ寺ニ居住シケル比、縁ノ端ニ出テ小刀ヲトギケル所ヲ、寺  
ノ同宿シユロ箒ヲ以テ後ヨリ走懸テ打ケルニ、ト平後ヘ見返様ニ、  
彼同宿力足ヲ誘引テ三間計飛ハセケルニ、彼同宿ハ庭ニ落テ夥  
數怪我ヲ仕ケレトモ、ト平ハ少シモ不当ト云リ。又或時、ト平障  
子ノ明テ有ケル中敷居ヲ枕ニシテ昼寝ヲ仕ケルニ、小性ニ云付テ  
与風障子ヲ指トテ為指ケルニ、ト平兼テ敷居ノ溝ニ扇子ヲ入テ寝  
タリシ故ニ、障子ハ不立ト云リ。其時、ト平ガ云ヤウ、「我常ニ  
油断ヲセズ。然共各不慮ニ怪我ヲ仕給フヘキ俛、タマシ打ヲハ無  
用ニセラレヨ」ト云シト云々。

『功名咄』五(下卷ノ上)

誠ニ、此ト平モ劍術ノ上手ナレハ、心モ至テ高上也。去ハ、者ノ  
上手タラン者ハ必油断ヲ嫌ト云リ。妻女モ流石ガト伝ガ孫程有テ、  
首途ニ夫ノ油断ヲ諫ケルコト殊勝也。又、此方ヨリ上手ト勝負ヲ  
決スル時ハ、油断ヲ討ント心懸間敷ヤ。上手ヲハ油断ヲ窺コトハ  
常ノ習也。爰ヲ以又我モ油断仕給フナヨ。常々武芸ノ嫌モ是油断  
ノ第一ト云也。去レハ、甲斐ノ武田信玄ノ詠歌ニモ、「人ハ城人  
ハ石垣人ハ堀情ハ味方油断剛敵」ト云リ。此油断剛敵ト云所ヲ能々  
思案シテ心ヲ勵シ給へ。

一 延宝ノ比、京都ニ菅如閑ト云宰人在。此者、元ハ周防・長門兩  
国ノ国主、松平大膳大夫殿ニテ大目附役ニテ長井治部左エ門ト云  
シ者也。然ルニ、出来家老ニ毛利八郎左エ門トテ知行三万石ヲ執  
者アリ。周防・長門ノ兩國共ニ此者ノ仕置ニ依テ、諸人歎悲ノ族  
多ク邪ナル計也ケル俛、彼治部左衛門、数十ケ條ヲ以奉諫言。彼  
八郎左エ門ヲ御退不被成。「曾ハ御為不可然」ト諫言仕ケル所ニ、  
八郎左エ門出頭甚シキニ依テ、却テ治部左エ門ヲ「氣違者ヨ無分  
別者」ナト云評判ニ成テ、御暇被下、京都六條辺醒カ橋ト云所ニ  
在宿シテ、菅如閑ト云テ在シニ、数年ヲヘテ延宝七年ノ春、太膳  
太夫殿ヨリ治部左エ門ニ「婦參可被仰付俛、江戸ヘ罷下ヘキ」由  
ニテ江戸ヘ下向ス。惣領長井四郎モ同道シテ下リヌト云リ。然ル  
ニ、治部左エ門ヲ被召出、家老・用人・目附三人ヲ以テ被仰出ケ  
ルハ、「婦參被仰附間有難可存者也。扱以前ノ如ク惡敷心根ヲ止  
テ御奉公仕候ヘカシ」ト被仰付ケル。其時治部左エ門云ヤウ、  
「最前奉諫言コトヲ各ニモ惡逆ト被思召ト見タリ。去ハ、諫言ヲ  
奉シコト共惡逆ニ罷成上ハ婦參仕モ無詮。此上カラハ毛利八郎左  
エ門我ラニ不ハ被下婦參仕間敷」ト云。三人ノモノトモ、「夫ハ  
余リ我俛也」ト云テ、兎角及口論則座ニ打果シケル所ニ、治部左  
エ門素ヨリ剛力早業人ニ勝レタルニ依テ、家老・用人・目附共截  
伏、其身モ則戰死スト云リ。長井四郎ハ此由ヲ聞テ、江戸ヨリ京



都へ二日半ニ上着シテ、母兄弟トモニ向テ「如此様子也。皆々覚悟可有」ト云捨テ、何所トモナク逐電ス。次男ハ道喜ト云シ。是ハチンバ成シカ故ニ、医術ノ志ニテ居タリシガ、是モ何所トモ不知逐電シタリ。然ルニ、大膳大夫殿ヨリ「治部左エ門ガ妻子、京都ニ在下聞。討テ捨ヨ」トテ大膳大夫殿、京都ノ屋敷守リ笠原新右エ門ト云者ニ被仰付ケルニ、京都町奉行前田安芸守殿へ參シテ此旨ヲ窺ケルニ、安芸守殿、「此方ヨリ与力・同心ヲ以テ搦テ可遣俥、左様ニ被心得候」トテ、延宝七七年五月廿四日早朝ニ、与力・同心、醒カ橋ニ襲来。如閑宿所ハ、兼テヤ覚悟シタリケン。三番目ハ於万ト云テ、生年二十ニ成ケルカ、折節火ヲ焼テ居タリケルガ、「大道へ大勢来テ内へ入ラントスルヲ何者ソ。是ハ窄人者ノ居所也。無着ムサト入給フナ」ト云ナガラ、上ニカ、リテ有ケル鍵ヲ執テ出向フ。戸口三尺有ケル所ヲ入来ケルヲ、於万、鍵ニテ突、続ヒテ一人ノ同心ヲハ、三男ハ十七才成ケルガ、刀ヲ抜テ走向テ左ノ腕ヲ討落ス。先懸ノ同心兩人手負テ引退ケレバ、臆シテ急ニ不得入。如閑ノ妻女ハ五十才計ナリケルガ、薙刀ヲ持テ出、四男ハ九才ニ成ケル末子ト脇指ヲ拔テ詰、臆シテ鈍々ニ入来ル所ヲ、内ニハ替々出向テ防戦ケルニ、当座ニ同心三人討伏タリ。ハ、九人ニ深手負セタリケル俥、不入得ソ支タリ。其時、母子共ニ向テ云ヤウ、「汝ラハ見知タルラン。唯今寄来ル者トモハ、長門ノ屋敷者欤」ト問ニ、「無左」ト云ハ、妻女ニヤウ、「見侍ハ、二條ヨリ来給フト見タリ。常々巾着切ヤスリナントヲ捕給ヒシトハ士ハ違侍ルヘシ。我々屋敷ヨリ来給フカト思侍、慮外ヲ仕侍ル。御公儀へ対シテ御恨ナシ。子細有ハ何モ二條へ被召具侍レ」トテ、太刀・薙刀ヲ投捨、自繩ヲ如掛シテ出タリ。扱、安芸守殿ヨリ大膳大夫殿屋敷守、笠原新右エ門ヲ召テ、此者トモヲ被渡ケル時ニ、妻女、新右エ門ニ向テ云ヤウ、「扱々、其方ハ臆病至極ナル者哉。我々如キノ者、御公儀へ申上テ討捕ト云コトヤ有。何ノ自身執ニ不来。自身来テ働テ不被捕時ハ、討死スル迄ヨ。嘸々京都御用等

モ不埒ニテ有ヘシ。我々国本ニ在シ時分ハ、未夫程ニ無リシ者ヲ。其方カ如キノ者ヲ京都ノ役人ニ登セ給フコトヨ。我々モ古蒙御扶持故ニ、笑止ニ思侍ル」ト云ハ、新右エ門面目ヲ失テ、兎角ノ不及返答ニモ赤面スト云ヘリ。安芸守殿、「此人々ヲ悪クハシ仕給フナ」ト云テ、長門ノ屋敷へ被渡ケル。其夜、「寢酒ヲ給度」由所望有ケレバ、「安キ儀也」トテ出シケルニ、面々毒藥ヲ服シテ、三人ハ其夜ニ死ス。三男十七才ニ成ケルハ、如何仕タリケン。明ル日迄命ノ存テ在ケルニ、「藥ヲ用ン」ト云ケレハ、頭ヲ振テ、「今日迄存命ナルコト甚無念也」ト云テ、湯水ヲタニ不吞、其日ノ申ノ刻ニ終ニ死スト云リ。毒ヲハ面々襟本ニ縫包ミ置タリト云リ。妻女ノ辞世、「玉ノ緒ノ風ヲフクメル燈ノ消テノ後ハ名ニ残ルラン」。娘於万辞世、「ヨシヤヨシウキ世ノ中ニ玉ノ緒ノ絶ナハ絶ヨ名ヲバ流サジ」。其後、惣領長井四郎ハ甲州（説ニハ上総ト云々）ニ隠レ居ケルヲ、如何シテカ知給ケン、大膳殿ヨリ被為討ケルト云リ。次男道喜ハ早駕ニ乗テ江戸へ下リケルガ、駿州藤枝ニテ兄ノ四郎ガ被討ケルヲ聞テ如何ハ思ケン、金子五両有ケルヲ駕ノ者ニ為執、則旅宿ニテ自害スト云リ。扱又、長門ノ仕置悪敷コト、御公儀ニモ被聞召及ケルガ、毛利八郎左エ門（ヲバ大膳殿御一家衆へ）御公儀ヨリ御預有シト云。誠ニ、此如閑一家ノ人々、女子童ニ至ルマテ如此ノ働、前代未聞也。常々如閑夫婦ノ人々、武ヲ心掛給フ故ニ、臨時覚有働有シト云ヘシ。惣領長井四郎コト残多シト云ヘシ。彼ラカ為ニハ、大膳殿ハ大敵ナレハ、如何ニモ隱身コト第一也。然ルニ在家被知ケルコト運ノ窮達ニハ依ヘケレトモ残多シ。次男道喜カ自害猶以籠忽也。世ニハ虚説ト云コトモ有。兄被討タリトモ、弥ヨク隱身終ノ本意ヲ達センコトヲ可思コト也。然ルニ、此人々ハ未若輩故ニ、心不足ト知ヘシ。兎角ニ敵方ニハ安々ト不被討ヤウニスルコト武ノ本意也。去ハ、運ノ窮タルハ不及是非所、一家不殘如此コト古今珍敷勇士也。アハレ生テ見マホシキ人々哉。善キアヤカリモノ

哉ト思フ所也。又、大膳大夫殿、我家頼ヲ御公儀ヨリ流人ニ被仰付コト無面目コトトモ也。恥ヲ不知。国ニハ不居トコソ聖人ハ宣シトカヤ。扱又、如閑力家老・用人・目附ニ向テノ云分ハ、余リ事過テ侍ル。理ノ過タルハ非ニ同スト云ハ、何トソ柔ニ云拔テ身退クニハ不如ト知ヘシ。此旨思量仕給ヘ。

一 大坂御陳之時於天王寺表、敵味方次第々ニ詰ヨセ、頓テ鎧前近ク成ケル時分、水野谷伊勢守家頼ニ小貫助兵衛ト云者有。此モノハ関東ニテ数度ノコトニ馴武功アリテ、知行ハ二百貫取シ者也。又、同家頼、元来ハ伊勢守殿伯父也シカ、知行ニ千貫取給ヒテ（當時ニ禮テハ三千石ノ所領也）、水野谷太郎左エ門ト云人有。此人敵味方十丁計リニ成テ備テ在シ時、彼助兵衛ニ向テ宣ケルハ、「何ト助兵衛寛有時節能心得ハ有間敷コトカ」ト宣ケル。助兵衛云ヤウ、「去ハ武士タル者戰場ニ臨テハ一番ニ懸入テ討死セント不心懸者アラン。併是ハ常々武士タル者ノ所存不珍ト存侍ル。我ラハ其上常々小身者ニテ、子共ニ為給度物ヲモ不為給、為着度者ヲモ不為着、サモトラシタキ僕從ヲモ不持シテ不自由ナルコト（ばかり）計為見侍ルコト、誠ニ憂コトニ存侍ル。所詮覺有憂目ヲ見ンヨリハ、一番ニ懸入テ討死仕侍ラント存侍ル。御前ニハ御大身ナレハ、左様ニ有間敷歎。我ラハ覚存シ成テ侍」ト云ハ、太郎左エ門、「如何ニモ最至極セリ。我々モ其段同前ニテ侍ル」ト被云シ。敵ハ大坂ニテ一番ノ剛敵ト聞ヘシ真田左エ門佐力御簾本迄モト心懸テ懸シ先鋒ニ被当シカハ、一タマリモナク敗軍仕タリ。然レトモ、此太郎左エ門・助兵衛ハ、一足モ不引討死仕タリト云リ。去ハ、此太郎左エ門、大坂へ上リケル道中ニテ、助兵衛ニ窃ニ談シケルハ、「何ト水野谷家中ノ面々、於戰場用ニ立ヘキヤ。無心元」ト宣ケレハ、助兵衛云ヤウ、「何モ無心元様子ニテ侍ル。大形御敗軍ト被思召侍レ」ト云バ、太郎左エ門、「左有ハ吾ハ討死也」ト宣ヒシカ、果シテ討死仕給ヒケルト云リ。扱、軍乱ノ最中、「水野谷伊勢守力家頼、

水野谷太郎左エ門討死仕テ死骸ヲ退侍ル」ト云テ、死骸ヲ馬ニ打掛、夥敷躰ニテ御簾本ノ前ヲ通ケルト也。去ハ、伊勢守殿備ハ悉ク敗軍仕テ、御前ノ取沙汰悪ク大形ハ御改易ニモ可有ヤナント世上ニハ沙汰セシカトモ、是等ノ歴々討死セシニ依テ不苦ト云々。誠ニ、此兩人有忠有義剛勇也。助兵衛力前日ニ敗軍スヘキ瑞相ヲ知ルハ智也。人於敵前味方ノ兵ニ勇義ヲ進メヌルコト、是第一ノ忠功トスル也。又助兵衛、「我子共ノ不如意ナルヲ付テモ討死スヘキ」ト云シコトハ、私欲ノ志シニ似タレトモ、是ハ全ク左様ノ心得ニテ云タルニハ不可有。去レハ、前廉ヨリ家中ノ面々義ナク忠ナク欲心ノ深ヨリ察タレバコソ、太郎左エ門ニハ大形敗軍タルベキトハ答タリ。定テ是ハ兩人云合セテ、於鎧前諸人ニ義勇ヲ進メ、又ハ欲心ヲ以テ勇ヲ進メシ者歟。去ハ、仏道ニハ是ラノ義ヲ煩惱則菩提ト云リ。事欲心ヨリ発スト云トモ、不覺シテ自ラ法ニ入得スト云コト也。又、於敵前、無心得兵ニハ無着トコトヲ不問懸者也。其故ハ、味方ノ臆セシコトヲ云フ時ハ、味方ノ凶事トナルコト速也。去ハ、於敵前、善惡共ニ味方ノ勇ム如ク云者也。是兵ノ法也。此旨思量仕タマヘ。

一 寛永・正保ノ比ヲヒ、紀伊国大納言頼宣公ノ家頼ニ安達六兵衛ト云者アリ。此者ハ未若キ者ニテ、殊ニ勇壮ナル生付也シガ、常々諸傍輩共、「我ハ何カ怖シヒ角カ冷シ」ナント云ヘバ、六兵衛ガ云ヤウ、「吾ハ人ヨリ外ニ怖シク思者ナシ。夫ヲ如何ト云ニ、何ノ変化又ハ如何ナル獸ト云トモ、人ノ如ナル大キナル牙ヲ持タル生物ハアラシト存ル。去ハ人ハ刀ト云テ、大形二尺五寸又ハ三尺計ノ牙ト、一尺五寸又ハ二尺計ノ牙ト二ツアリ。不知唐土、日本ニ如此ナル牙ニテモ角ニテモ持タル禽獸ヤ侍ル。故ニ我ハ人ヨリ外ニ恐シク思フ物ナシ」トカヤ。又、或時若キ者共寄会テ物語仕ケル時、紀州和歌山ノ二、三里近辺ノ山隘ニ大キナル池アリ。此池ニハ古ヨリ主力有ト云伝テ、諸人威懼テ近付寄者ナシ。其池ハ、

両方ノ山嶮<sup>サガ</sup>シク萬木枝ヲ連ネ池ノ上ニ生茂、大キナル藤ノ通<sup>ツル</sup>両方ノ諸木ニマトヒ付、池ノ上ヲ彼方此方ヘハイ越テ、中ヲ自由ニ往來ノ成如クニハ有ケレトモ、池ノ深シテ底ヲ不知ケレハ、恐シナント云計ナシ。

誠ニ、主ノ有ト云トモ必定也ナント云ハ、六兵衛カ云ヤウ、「各ハ女童・土民ナントノ云コトヲ信用有テ左宣フハ、若キ衆ニハ不似合」ト云ヘバ、座中ノ面々、「六兵衛殿ハ情ノ剛人哉。古ヨリ彼池ニハ主力有ト云ニ、貴殿独り無シト云タレトモ、其ハ理力立申間敷」ト云。端々ニハ笑フ族モアリケリ。又其内ヨリ「六兵衛殿、左宣ハ、夜池ヘ行給テ、印ヲ付テ歸リ給フヘキカ」ト云ハ、六兵衛、「如何ニモ安キ儀也。カケニ仕給ハ、可行」ト云。座中ノ面々、「如何ニモ是ハカケニ可為」ト云ハ、六兵衛、「扱カケニハ何ヲカ仕給フ」ト云ヘバ、座中ノ面々、「唯今我ラ共ガ指テ罷在刀脇指ヲ可遣」ト云バ、「左有バ可行」トテ、彼池ヘ行ケルニ、一方ノ山岸ヨリ藤ノ通<sup>ツル</sup>ヲ伝テ池ノ中ヘ四、五間モ出。六兵衛カ刀ハ三尺計有ケルヲスルリト拔テ、吾足ノ大指ニ切先ヲ挟ミ水ニ混シテ、「此池ニハ主ガ有ト聞。有ハ出ヨ。対面セン」ト云テ居タリケレハ、何トヤラン物<sup>モノ</sup>冷敷<sup>サムシク</sup>、俄ニ池浪高ク成テ、次第ニ水増來テ、最前足首迄混ンテ居タリシニ、膝口迄増來ケレバ六兵衛モ不思議ニ思テ、夫ヨリ又高キ藤通ニ移テ又足首迄混シ、最前ノ如クニシテイケルニ、弥池浪タカク成テ、膝口迄水ノ増來ケルニ、何ニカハ不知、足ヲシカト喰ヘケル所ヲ、六兵衛少シモ不臆刀ヲ指込刎ケルニ、水中ニテ夥敷狂ヒ動テ離去。又夫ヨリ陸ヘ上リテ我刀ヲ見ルニ、鏢本迄赤<sup>アカ</sup>ニ染タリ。六兵衛、扱ハ少シハ手ヲ負タリト思ヒ、其所ニ印ヲ付テ歸リケルニ、六兵衛自体小歌ガ上手ナレバ小歌ヲ謡テ歸リケルト也。又、最前カケニ仕タル座中ノ面々、跡ニテ云ヤウ、「何モ如何ハ思給フ。六兵衛ヲ彼池ヘ遣シ、自然主ニ被取ナント仕タランニハ不便ナル儀也。又ハ時世ノ謗<sup>ハカベン</sup>モ如何也。イサヤ行テ六兵衛ヲ見届ン」ト跡ヨリ大勢行ケルニ、道ニ

テ碓ト行逢タリ。「何ト六兵衛替タルコトハ無力」ト問ニ、「否ヤ何コトモナシ。併覚有コトノ有シ俛、明日行テ見」ト云バ、「扱々貴殿一人遣セシニ、先何コトモ無リシコト、誠ニ嬉敷儀也」ト云ヘハ、六兵衛ハ、「何コトカ可有」ト、コトモ無ニ云テ居タリシト云リ。扱、明ル日、彼池ヘ大勢行テ見ニ、池ハ一面ニ血ニ成テ、諸人希<sup>ケツ</sup>有ノ思ヲ成、「池ノ主ニ手負セタルコト必定也。ヤ、ソレサガセ」ト云テサガシケルニ、有所ノ岸ノ下ニ大ナル朽木ノ如クナル物アリ。是ヲ引上テ見ケレバ、鱒<sup>ホラ</sup>結<sup>アキ</sup>ノ三間計有ケルガ、背中ナドニハ苔ムセル如ク古ルビタルガ、鰓<sup>アキ</sup>ヲ被截放テゾ死タリケル。

誠ニ希有儀也。扱、座中ノ面々、「刀脇指ヲ可遣」ト云バ、六兵衛、「時ノタハムレニコソ云ツレ。各ノ刀脇指ハ不入」ト云ハ、「誓言セシ上ハ是非々可遣」ト云バ、六兵衛、「左有ハ其代ニ、一夕宛被召寄侍レ」ト云バ、何モ振舞スルニ成ヌトカヤ。

此段、頼宣公モ被聞召及、弥重宝ニ被思召ケルト也。其後、紀州ニテ知行千石取テイタリシ。或侍、頼宣公ヘ不足ヲ云テ和歌山ヲ立退ケルヲ、大納言殿是ヲ立腹有テ、「追駈テ討留ヨ」トテ、侍兩人ニ組頭ノ宅ニテ被仰付ケルニ、此六兵衛モ討手兩人ノ内也ケル。一人ノ者ハ、「私宅ヘ歸リ用意シテ追駈ン」ト云テ、宿所ニ歸ル。六兵衛ハ直ニ追駈行ケル俛、七、八里カ内ニテ追付タリ。彼侍ハ馬ニ乗テ、若党・鎧持五人ニテ退ケルニ、六兵衛、草履取一人ニテ追駈行ヲ見テ、若党兩人殘シテ為防ケルヲ、六兵衛主從シテ右ノ兩人ヲ截伏テ、尚慕行ヲ見テ、又若党・鎧持三人ヲ殘置ヌ。六兵衛ハ、草履取ト兩人懸リケルニ、六兵衛、吾草履取ニ「脇ヨリ廻レ」ト下知スレバ、敵ノ鎧持、是ニ氣ヲ動シテ鎧ノ穂先、六兵衛ヲ少シ背タリケル所ヲ、六兵衛走懸テ切倒ス。是ヲ見テ一人ハ何処共ナク逃去ヌ。残り一人ヲハ吾草履取ニ「討」ト下知シテ、六兵衛ハ猶主人ヲ追駈行ニ、此隙ニ彼士ハ馬ヲバ乗放シ、在家ニ入テ腰障子ヲ一間明テ、刀ヲ拔テ待懸タリ。六兵衛ハ其近



隣ニ於テ様子ヲ問テ尋行キ、是ヲ見テ六兵衛刀ヲ捨テ、トビ入テ取テ押ヘケル処ニ、彼草履取ニ「討」ト下知セシ若党、如何ハ仕タリケン、草履取ニ数ケ所ヲ負セ追マクリ、「檀那ハ々」ト云テ尋来ケルニ、彼主人、「爰ニ在。助ケヨヤ」ト云ヘバ、「心得タリ」ト云テ、血刀ヲ振テ助来ル。其時、六兵衛足ヲ以テ腰障子ヲ指塞ギ、足ニテ押テ不為明。若党障子ヲ明レトモ不明ケレバ、持タル刀ニテ六兵衛力脇腹ヲ突タリ。六兵衛、其時脇指ヲ抜テ、先下ナル主人ノ首ヲ押落テ立上リケルヲ見テ、彼ノ若党ハ是ニ恐テ逃ル所ヲ、拾四、五間ハ追駈ケレトモ、被突疵ヨリ腸ノ出タリケレバ、続テモ不被追、其所ニ居タリケル。其内ニ、彼若党ハ何処共不知逐電仕タリ。其後、所ノ百姓共ニ首共ヲ為持、我身ハ戸板ニ被為乗テ和歌山ニハ帰ケル。此段、頼宣公被聞召、「扱々惜キコト哉。則是ヘ召連来ヘシ。責テ直ニ様子ヲ尋聞ン」ト宣ヒテ、戸板ニ被為乗ナガラ、御前ヘ被召出ケルニ、起直テ様子委細ニ申上ケル。頼宣公、弥御惜ミ思召、外科医者不殘被付置、種々医療ヲ被尽ケレトモ、終ニ此手疵ニテ死スト云々。

誠ニ、此六兵衛勇猛ナル生付ト云ヘシ。去ハ、覚有勇猛ノ者モ、少シノ失ニ依テ蒙疵ケル者也。去ハ、武士ハ有勇、不離慎コソ本意トハスル也。又、敵ノ鎧持ニ懸ケルニ、吾草履取ニ脇ヨリ〔落字有シカ〕本意トハスル也。又、敵ノ鎧持先背ケル所ヲ走懸テ討シコト、最能手段也。誠ニ、覚勝負際ニテ氣ノ働コト、無勇難成。是ソ武田晴信信州戸石合戦ノ刻、山本勘助力謀ヲ以テ村上勢ヲ南ヘ向テ討勝ケルニ同シ。扱又、最前池ニ足ヲ混シテケルニ、次第ニ水ノ増シト云ハ、左ニハ不可有。腰ヲ掛テ居タル藤ノ通、六兵衛ガ重リニテ次第々ニタワミタル成ヘシ。波ノ立ンコトハ、魚ノ波ヲ立ルハ自由ナルナレバ不珍ト知ヘシ。去ハ、覚有所ヘハ同シクハ不行ニハ不如。若又、不行シテ不叶義有ハ各別也。然トモ、魔所ニテ人不行ト云所ヘハ不行者也。其故ハ、神秘ナドニテ左様ニ云所モ有物也。其所ノ浅間ニ成コトヲ嫌テ魔所ニ非スシテ被殺タ

ル様ニハ、紀州ノ或山中ニ古キ社檀アリ。此所ハ魔所ニテ人不行ト云シニ、押テ行一宿スル者アリシニ、魔ノ所行ニテ取殺タリトハ云シカトモ、正シク鎧疵ノ有シカハ、人ノ所為タルコト勿論也。誠ニ此六兵衛力如クノ働ハ、勇猛ノ男ニ非スンハ難成者歟。此旨勘弁仕給ヘ。

一 延宝八庚申ノ中秋、役儀ニ付テ幡州赤穂ノ在之見廻ケルニ、牟礼村ト云所ニ、三枚<sup>①</sup>城戸・首塚ナト云所有ケル俣、其来歴ヲ委ク問尋ヌルニ、牟礼ノ東シ村ノ庄屋次郎兵衛物語仕ケルハ、「今ヨリ百年計以前、此所ヲハ太田治内殿ト云人領知仕給ヒシ。向フニ見ヘタル北畠ト云村ニ居住ノ屋敷跡アリ。則此上ノ玄堯寺山ノ城主ニテ御座有シガ、舅ヲハ矢野ノ下土井山ノ城主、小河丹後殿ト云人也シ。然ルニ、其節ハ天下戦国ニテ、我々持ノ領地ヲ諍テ互ニ攻合ケルニ、或時丹後殿攻来リ給ヒケルニ、治内殿ハ此所ニ虎落結、三ツノ城戸ヲ拵給ヒシハ、虎落跡則此敷畔ニテ侍ル。故ニ、此所ヲハ三牧城戸トハ申シ侍ル。太田治内殿、此所ニ出張給ヒ、防戦給ヒケル所ニ、小河丹後殿籓本勢ヲ以テ治内殿ノ右ノ方ヌセ周世坂ノ脇、権現ノ谷ヨリ押廻シ切懸給ヒケルニ、味方路ニハ虎落城戸有ハ、急ニ二勢攻来ルコト不成。治内殿ハ、先勢籓本一ツニシテ防戦ケレバ、小河方逃ルコトモ不成。雑兵モ多分被討、其ニテ丹後殿モ討死仕給ヒシト云テ、筑紫海道ノ山際ニ塚二ツ有。東ニ有ヲ丹後殿ノ首塚。西ニ有ヲハ雑兵ノ首塚ト申伝ヘ侍ル。其戦ニ我ヲノ曾祖父ヲウチモ討死仕テケルヲ、祖父ハ十才計ニテ有シ俣、余リ悲クモ思ヒ侍ラザリシ。其時分ハ、此矢野川殊之外深クシテ如淵ニテ侍シ」ト語り侍リシト也。其所ハ、今モ矢野川彼方此方ヘ曲リ流テ、能隘せまリニテ有之。

此戦ヲ今思量シテ見侍ルニ、此次郎兵衛ガ物語、先祖ハ有兎有角、今ハ百姓ナレバ軍ノ味ヲ不知不委。<sup>②</sup>能々此ヲ思量仕テ見侍ルニ、小河丹後、方便ハ、一向ニ裏ノ術ト云テ、古来用来ル軍術ノ



第一也。然トモ、軍術ノ厚味ヲ不知人ハ、皆以同シコトタルヘシ。去ハ、小河方ノ先勢柵際ニ懸テ攻戰時、不意ニ裏ヘ廻シテコソ利有ベケレ。去ハ太田方ニハ、最前ヨリ虎落ヲ結テ軍勢ノ氣ヲ静テ、心ヲ寒ニ仕テ防戦ケル所ヘ、小河方ニハ小軍ヲ二ツニ分タレハ、弥氣ヲクレシ、先勢ハ虎落ニモ氣ヲ被障テ不得懸ヲモ不弁。古ヨリ書伝ニ有テ小勢ヲ以テ裏ヘ廻テ懸リタルヲ、太田方ニハ軍勢ヲ不分居數テ侍懸。又一方ノ小河方ノ先勢ノ方ハ虎落城戸有ケレバ、タヤスクハ難敗シト思テ、心易ク廻シタル小河勢ノ小人數ヲ見澄シテ、安々ト討取タル成ヘシ。去ハ、軍術ニ勢ヲ分ルト云コト能大事ニスル所也。備ヲハ余多ニ仕テ、勢ヲ不分ト云所ノ秘伝有。工夫仕給ヘ。去レハ、相手向ノ切合ニモ、如何ニ能太刀筋ノ極意ヲ覚タリトモ、程拍子悪クハ人ニハ不可被勝。軍術ヲ以テ同シ。此戦ニモ<sup>ひそかに</sup>山ノ上ニ相図ヲ定ヲキ、追手ヨリ急ニ懸テ攻戰、動モセハ、城戸ヲモ可被打破ト思ヒ、敵モ動転スル所ヘ不意ニ裏ヘ廻テコソ、利ハ有者ナレ。如此品々能々了得仕給ヘ。

① 枚↓枚(大)。ただし後出(八行あと)では牧(底本・金)。②「シカラ」は送り仮名として記す。「委シカラズ(不)」となる。

一 寛永・正保・慶安ノ比ヒ、浅野内匠頭殿家頼ニ灰方彦兵衛、法体仕テ道体①ト云シガ、若キ者共ニ向テ物語仕ケルハ、「皆々能合点仕給ヘ。世上ニ秘藏スル刀脇指ヲ見侍ルニ、其身ニ不応結講ナル札折紙ノ付タルト云刀脇指ヲ指給フヲ見テハ、何ト様<sup>ためし</sup>テ見給フカ、切無心元ト被思侍ル。譬又様給フト云ヘハ、大形首カ細腰カ足ノ甲倍②如キノ弱キ所ヲ少シ誠<sup>まこと</sup>給フラント。我ハ悪敷心根カハ不知、被推量侍ル。又、此刀ハ疵有トモ、代々持来テ切刃ニテ侍ル。又ハ出来モ悪敷下作ニテ侍レトモ、切一種ニテ指侍ルト云刀ヲ見テハ、誠ニ左モ有ヘシ。是程ニ見苦敷ヲモ不構シテ被指侍ルハ、如何ニモ嘸<sup>まじ</sup>有ラント被為推察侍ル」ト被云侍シト也。誠ニ、此道体ノ物語リ名言ト云ヘシ。刀脇指耳ニ不限、其数奇好

所ニ依テ、迷コト諸事方端ニ付テ同シコト也。其物ニ文ト実トノ理有。去レハ、上ノ飴粧スルヲ文ト云、本ノ正シキ道理ヲ実ト云。是ヲ刀脇指ニ執テ云ハ、刀ノ切刃ニテ物ノ能切ルヲ実ト云ヒ、刀ノ出来カツコウ柄鞘ノ物数奇等ハ文也。覚云ハトテ、実理ヲ專トシテ余ニ文ノ無キモ悪シ。是ニ迷ハ悪シ、ト云コト也。虚ト実ト能々心ヲ付テ我身ヲ制シ止スンハ有ヘカラス。論語ニモ「曾子曰吾日二三タヒ省吾身」トアリ。

① 体↓三本とも「目錄」は「休」。② 倍↓杯(大)。

一 肥州島原ノ城落去以後、黒田甲斐守殿、武州江戸ヘ下向仕給ヒケル節、浅野内匠頭殿対談ノ次テニ、「我等ハ終ニ軍ヲシキ儀ニモ不合侍。今度一揆トハ云ナガラ、武功ニモ可成儀モ侍ハ、御芳志ニ御物語侍レ」ト所望仕給ケルニ、甲州御物語有ケレハ、「去レハ、各ニモ能被心懸侍レ。我ラ常々家頼ノ面々ヲハ、彼ハ不心懸者也。彼ハ勢<sup>ウツク</sup>虚也。軍事ノ用ニハ如何ナト思、<sup>ネシコロ</sup>懇ニモ不召仕、無沙汰ニ思タル面々モ有。然ルニ、正月廿二日ノ夜、城内ヨリ夜討ノ時、敵競懸テ、我モ己ニ討死スヘシト思ヒケル程ニテ、家頼ノ面々將碁倒シスル如ク討ル、ヲモ不顧、乗越々討死スルコト、何レヲ何レ共難分。誠ニ、其躰ヲ見侍テハ、常々無情、無沙汰ニ召仕タル者討死仕タルニハ、如何常々無情思ヒケント、今更無面目不便ニ思ヒ侍ル。相構テ郎從ヲ召仕ンニハ、常々情深ク可召仕者也。我ラ今度存当テ侍ル」ト宣テ、泪クミ給ヒシトカヤ。去ハ、内匠頭殿ニモ、常々郎從ニ情深能言葉ヲモ懇ニ被掛シ。武士ノ義ニ依テ、命ヲ輕スルハ不珍ト云ナカラ、常々情深キ為主君捨命コトハ、最安カルヘキヤウニ被思侍ル。去レハ、名将ノ下ニ弱兵ナシト云シハ、如此常々情深ク、軍ノ凶ニ当テ可勝ヲ見知テ戦給ハ、可恐故モナク不勝ト云コトナキハ此所ヲ謂歎。

一 元和ノ比、最上宰人ニ原甚左エ門ト云者(其比最上源五郎殿ト申セシ人、身

代破滅シタリト云リ。此人ノ家来歟、奥州米沢〔米沢ハ上杉景勝ノ居城也〕ニ来リテ、城下ニ、三里近辺ノ在郷ニ族宿シテ在シニ、城下ニ出テ日暮テ僕ヲモ不連、一人宿所ニ帰リケルニ、狼ノ跡ヨリ慕来ケル俣甚右エ門モ心氣遣シテ行ケルガ、自躰狼ハ扶<sup>①</sup>ヲ振テ、ヒヤウタト鳴音ニ恐ケル俣、突タル杖ヲ打振々仕ケレバ、狼跡ヘ下リケルト也。甚右エ衛門、時々如此シテ帰ケルニ、又扶<sup>①</sup>ヲ打振テ執外、何処トモ不知失ヒタリ。夫ヨリ刀ヲ押廻シ、用心シテ帰リケルガ、或所ニテ道ノ傍ナル石ニ腰ヲ掛テ休居ケル所ニ、跡ヨリ狼慕来テ、甚右エ衛門カ休居ケル一間計リ向ヘ来リ。甚右エ衛門ガ目間ヲ見テ動トモセハ、トヒ懸可喰倒トネラヒイタルニ、甚右エ衛門ハ扇ヲ仕ナガラ是ヲ見テ、刀ニテ抜打ニ可切カト思ヒケルガ、「否々、狼ハ早キ物ナレバ切損シナン。指殺ヘシ」ト思テ、トビカ、リニ彼ガ耳ヲト心懸テ執ケルニ、左ノ手ハ耳ニ掛リ、右ハ過テ狼ノ口ノ内ヘ突込タルニ、甚右エ門少シモ不騒、直ニ咽ヘ突込ケル俣、腕ニ二、三ガ所齒形付タレトモ、終ニ狼ヲ押伏、小脇指ヲ抜テ留ヲ指タリト云々。

誠ニ、武士ハ心懸ナケレハ、時ニ至テ心動シテ如此ノ働ハ難成者也。去ハ、此甚右エ門、常々勇猛ノ心有シニ依テ、狼ノ口ヘ手ヲ指入ト云ヘトモ、少シモ騒ク心ナク、直ニ喉ヘ押込シニ依テ、狼齒ヲ喰合スルコト不成シテ留ヲ指シコト、実以殊勝ノ働ト云ヘシ。去ハ、最前ヨリ覚悟仕タルコトハ成安ク、前方ニ覚悟セサルコトハ難成者也。其故ハ、大ナル炙ヲ居<sup>スル</sup>ト云ヘトモ、トビ火ニハ騒コト常ノ習也。依之武ノ家ヲ継シ者ハ、身ヲモ心ヲモ柔弱ニ持コトナカレ。譬バ、其身ハ微塵ニ碎カル、トモ、心ハ金剛ノ如ク剛強ニ嗜コト勿論也。但シ、覚云ハトテ、其形ヲカサリ目ヲイカラシ、人ヲドセト云ニハ非ス。身心トモニ強ク寒暑ヲモイトハス、時ニ臨テハ白刃ヲモ踏落ス程ノ勢アレカシト思フ所也。此段能々勸弁仕給ヘ。

① 扶<sup>①</sup>杖(金)、杖(大)。なお冒頭のみ甚左エ門。

一 慶長ノ比ハ 家康公ニハ駿府ニ御在城也。然ルニ、板倉伊賀守殿ヲ「京都ヘ登テ諸士代役可仕」由被仰付ケル時、伊賀守殿、「女共ニ相談仕、御請可仕」由申上テ帰ル。傍ナル人々、「扱々笑敷コト哉。天下ノ諸士代役杯セン男カ、女トモニ可為相談由ヲ申コトヨ」トテ、手ヲ撃テ笑ケル。然ルニ伊賀守殿宿所ヘ帰り、内室ニ向テ宣ヒケルハ、「今度京都諸士代役被仰付タリ。其方ガ心入次第二御請可申ト思也」ト宣ヒケレハ、「扱々目出度御コト哉。何トシテ早速ニ御請ヲ不仕給シテ、我ニ談合トハ宣ヒケルソ」ト云。其時、伊賀守殿宣ケルハ、「世間ノ躰ヲ見侍ルニ、如何ニ賢キ男ト云ヘ、妻女ノ云コトニハ迷テ僻コトスル族多シ。善惡トモニ其方一円ニ言<sup>モリユウ</sup>間敷ト云儀ナラバ御請可為」由ヲ宣ヒケル。御内室、「左宣ハ何ニ<sup>①</sup>善惡共ニ可云」ト宣。睨<sup>しかと</sup>ト左様ナラバ可為御請」ト云テ、袴ヲ着シ出給フトテ、袴腰ヲ一ネチ、テ<sup>②</sup>着テ出給ヘハ、御内室ハ是ヲ見給ヒテ、「夫々腰ガネシレ侍ル」ト宣フ。其時、伊賀殿宣ヒケルハ、「夫見給ヘ。今ノ程ニ口ヲ堅テサヘ善惡ヲ宣フ。左有ハ御請ハ不成」ト云テ、着タル袴ヲ脱給ヒケレバ、御内室其時、「神ニカケ仏ニ誓テ、向後兎角ノコトヲ云間敷」由也。「左宣ハ御請スヘシ」ト云テ、御請シテ、京都ニ登給フニ、江州大津ニテ大道ニ牛ノ居タリケルニ、「我諸士代役ニテ登ケルニ、立テ居タルハ慮外者也。夫成敗セヨヤ」トテ、即時ニ牛ノ首ヲ伐給ヒケレハ、諸人は是ヲ見聞シテ、「扱々今度ノ諸士代ハ無理野夫智ナル男也。怖シサヨ」ナント云テ、三ガ年ノ内ハ、公事沙汰ニ出ル者ナシト云リ。其内ニ、京都辺ノ人ノ心根・風俗ヲ能々聞濟シ會得シテ、公事沙汰ヲ執行給ヒシニ依テ、僻事ナカリシト云リ。

然ルニ、「京都ノ仕置緩カセニシテ、殺伐ノ沙汰一円ニナク怠リ有」由、駿府ニ於テ取沙汰有ケルニ依テ、被召寄、直ニ御尋有ケレハ、「私京都ヘ罷登侍テ以来、拾余人成敗仕侍ル。アハレ智恵モ侍ハ一人モ死罪ノ者有之間敷者ヲ」ト無念コトニ云ケレバ、兎

角ノ不及御詮議ニモ為上テ給ヒシト云リ。其上、智恵才覺世ニ勝給ヒケルコト広大ナルカ故ニ不書。其長男周防守殿モ伊賀守殿ニ不劣智覺世ニ勝給ヒシ。或人、伊賀守殿ニ向テ周防守殿ヲ賞美シケレハ、伊賀守殿宣ヒケルハ、「去ハ周防守モ妻敵打程ナルウツケニテハナシ」ト宣ヒシト云ヘリ。又、周防守殿、毎度公事沙汰ヲ聞ニ出給フ節、「アツハレ君モ御覽セヨ」ト云、舞ヲ一サシ宛舞給ヒテ出給ヒケルトカヤ。「是ハ少シモ依怙最負ハス間敷」ト云心得ニテ有シニヤ。次男内膳正殿ハ肥州島原ニテ討死仕給ヒシ。去ハ、嶋原ノ城強クシテ不落ケレバ、跡ヨリ松平伊豆守殿、戸田左門殿為御名代下シ給ヒケレバ、内膳正殿、先ニ下リ給シ甲斐モナク、其上兄ノ周防守殿ヨリモ、「其方先ニ下リケレトモ、戦功ナシトテ如此両使下向ス。其下着ヨリ先ニ城ヲ乗取欵。無左於テハ討死セヨカシ」ト被思文言也ケレハ、依之元日惣攻有シニ、其未明ニ江戸心友ノ方ヘ書状アリ。其状ニ云ク、「去年ノ荒玉ニハ烏帽子ノ緒ヲシメ、今日ノ荒玉ニハ甲ノ緒ヲシメ早打立申候」ト書テ「アラ玉ノ年ノ初ニサク花ノ名ノミ残ラバ先懸ト知レ」ト云一首ヲ詠シ越給ヒ、討死有シトカヤ。哀成事トモ也。去ハ、其比備後福山ノ城主水野日向殿ハ老巧ナレハ、「対面シテ軍談評儀ヲモ可聞」由上意成ケレバ、於鞆浦モトノ兩使評談セラレケレバ、日向守殿宣ヒケルハ、「豊後府内ニ滞留仕給ヒテ、上方ヨリ猿樂トモヲ招下シ能ナド見テ遊給ヘ。必嶋原ヘ越給」ト宣シ。アハレ長シヤカ成云分也。コレハ先ヘ被仰付下シ大将不攻落ト云テ、跡ヨリ大将ヲ下シ給フ時ハ以前ニ下シ、大将不攻落コトヲ無本意コトニ思ヒ、大半討死スル者也。此所ヲ思量シテ覚ハ宣ヒシトカヤ。其子内膳正殿ハ、其歳十六ニテ既ステニニ親父一所ニ討死スヘキトセラレケルヲ、家頼ノ面々是ヲ助テ帰ルトカヤ。此人今ノ世ニハ賢キ人ト被云給ヒシ。寛文年中ニ為御名代京都ヘ上リ、三ヶ年勤給ヒシ。内諸事猥カハシキヲ糺給ヒ、毎日二人ヲ殺給フガ如ク征伐ヲ行給フニ依テ、諸人威恐慎ケルニ依テ、結句咎人モ少ク有

シ。其故ハ、其前牧野佐渡守殿諸士代ノ時分、緩ニ成シト並シニ仕侍ルニ、三ヶ年ノ死罪者少シトカヤ。去ハコソ、板倉家ニハ知恵ノ袋ヲ讓給フ故ニ、何モ他家ノ人ヨリハ智徳ノ人多シト云トモ、真実ニハ左ニハ非ス。板倉家ノ人々ハ一ヶ月四、五度宛会日ヲ定テ一家寄合、萬事詮議仕給ヒケル。此故ニヤ、少宛ノ勝劣ハアレトモ、智徳有人々多シト云リ。次ニ、「妻敵打程ノウツケニテハ無シ」ト宣ヒシコト、我モ若キ時分ハ合点不行シテ不審ナリシガ、近キ比合点シタリ。去レハ、妻敵打タラ人手柄ト不云。扱又油断シテ妻ヲ被盜タリト云悪名ヲ広メ、大身ノ御方ハ後記ニモ残ル。妻敵ヲ不討時ハ、其虚実不知、又世ノ讒モ有ナラヒナレハ、睨ト必定トハ誰力定ン。又、妻敵打時ハ、万一世ノ浮説又ハ讒モ有コトナレトモ、虚モ実ニ成、其浮説ハ其所ノ計也。其上時去ヌレハ云止コト勿論ナレトモ、妻敵打時ハ、近国ニ無隠。又彼ガ親、彼ガ祖父コソ妻敵ヲ打タレト云ト何ノ沙汰ナシトハ、如何ニ兎角ノ取沙汰無力増タリト思フ所也。譬其事実也ト云トモ、浮説ニ取成、程経テ離別センニハ不然。去ハ、子孫面俯モトヲモンヨリハ、我立腹ヲ堪忍シテ、永ク子孫ノ為、曾我身ノ為ヲ可思事也。又、先祖伊賀守殿人ヲ不殺給仕置、内膳正殿人ヲ殺給フ仕置、善惡不二也。唯、時節相応有ヘシ。余リ二人ヲ不殺トスレハ大罪発事、古今ノ例也。「両葉時不伐棄為將もちいトマサニ斧ヲ」ト云リ。小罪ノ時ニ不怠タラ不制禁セ、盜賊ニモ侈り生シテ大ナル悪事ヲ巧事勿論也。去ハ、盜賊ヲハ国端ニモ指置間敷様ニ制禁スヘシ。又、第一ニハ吾心ノ内ニ君子有、盜賊有。此君子ヲ養育シ盜賊ニバ<sup>③</sup>日夜旦暮ニ無油断可為制禁。少モ油断スル則我モ頓テ盜賊ノ骨頂コツヤウト其名ヲ顯スヘシ。扱、君子心ハ如何ト云時ハ、常ニ仁義ノ道ヲ心懸、忠孝ニ達スル心義ニ依テ、一命ヲ捨ン事ハ鵝毛ヨリハ輕ク、又常ニ身ヲ立慾心ニ不迷事ハ金鉄ヨリモ堅ク、重キヲ君子ノ心ト云コトソ。又盜賊心ト云ハ、我身ヲ深く愛シテ、寒熱ニ当ラン事ヲ深く厭、人ノ物ヲ無法



ニホシカリテ、偽リ曲ル心、色慾ニ迷テハ身命ヲ捨ルコトヲモ不肯如クノ心也。カヤウノ心ヲバ疾々外ニ迫出シテ、心ノ内ニ不置ヤウニ可制禁。少モ制禁ニ怠リ有テハ、君子心ノ力尽テ、盜賊心ノ威勢ヲ得テ、何ト制スヘキト思トモ不可叶。其以後ニコソ思ヒ、内ニ有ハ、色外ニ顛ル習ナレハ、盜賊悪人トハ諸人知り、扱コソ紅羅・袖裏、頭分明トモ云リ。

①何ニニ↓何ンニ(金)、何ニ(大)。②ネチ、テ↓ネチニテ(大)、ネチツテ(金)。③ニバ↓ヲバ(大・金)。

一 大坂御陳之時分、水野日向守殿家頼ニ中川形部左エ門ト云者、又同傍輩ニ中村新八ト云者、武扁公事ヲ仕テ 権現様被為成御聞、彼兩人ヲ被召出、黄金一枚宛被下テ無事ニ成タリト云ヘリ。其働ヲ尋ヌルニ、其場所ハ不覚、中川形部左エ門、田畷ノ細道ヲ乘行前ニテ、鈴木田隼人正ト云、大坂方ニテ大将分ノ者ト出合タリ。隼人正モ鎧ヲ持、形部左エ門モ鎧ニテ出合タル所ニ、形部左エ門云ヤウ、「大将ト見ヘタリ。鎧ヲ捨テ組フ々」ト云ケレハ、隼人正「心得タリ」ト云テ、鎧ヲ投捨トシテ懸ル所ヲ形部左エ門出抜テ鎧ヲ不捨、隼人正方脇壺ヲ突テ突倒シ、飛懸テ首ヲ執ントセシ所ヲ、隼人正ハ力量勝人タル男ニテ、形部左エ門ヲ抓<sup>ツカシ</sup>テ抛退<sup>オケノケ</sup>、フリ帰見ル所ヲ中村新八統テトビカ、ツテ起シモ不立、隼人カ首ヲハ執タリケル。此新八ハ、甲ヲモ具足ヲモ狸ノ皮ニテ包ケレバ、諸人此男ヲバ狸皮トソ名付ケル。依之、形部左エ門ハ、「我高名也」ト云ハ、新八ハ、「兎ニモ角ニモ、隼人ガ首ヲハ我執タル上ハ、我高名ニ歴然紛ナシ」ト云ニ依テ、武扁公事トハ成ニケリ。何モ兎角ト扱ケレトモ、兩人トモニ一向ニ不聞入ケレハ、可為様ナクシテ有シヨ 権現様被聞召テ、「流石ノ狸皮程ノ武士ナレバ、合点セヌコトハ有間敷ケレトモ、世間ニ名広クセント思フ所成ヘシ」ト上意有テ、右ノ如ク被召出、御褒美ヲ被成下ケレハ、兩人謚ケルト云々。

『功名咄』五(下卷ノ上)

誠ニ、此兩人最勝レタル勇士ト云ヘシ。其故ハ、先形部左エ門、隼人正ヲ大将ト見ヘタ鎧ヲ捨テ「組フ々」ト云テ謀リ、隼人鎧ヲ捨テ懸ル所ヲ、我ハ鎧ヲ不捨シテ鎧付タル機転、最勇謀ト云ヘキ物歟。大躰ノ武士ハ、左様ノコト急ナル所ニテハ如是ノ謀言ハ出間敷者也。去ハ、過ニシ明曆三年、武州江戸ノ火難ニハ、焼死スル所先十万余人ト記ス。其外、屋敷方ハ不知数ト也。故ニ、諸人兵乱トテモ、別ニ替ルコトハアラント思ヒシトカヤ。其時分、我父ノ方ヘ大野何某ノ許ヨリ云越ケルハ、如此時節、諸人ニ勝タル一言也トモ言度物也ト思ヒシカトモ、終ニ一言モ不被云、無念ナルコト也ト云御越ケル。此男モ常々心懸タルモノナリ。誠ニ、可有左コト歟。又中村新八、形部左エ門ヲ抓<sup>ツカシ</sup>テ投退タルヲ見ナカラ、透間モナク懸テ首ヲ執事、何ヲ何トモ難云高名也。 権現様ニモ此所ヲ思召テ、兩人ヲ被召出テ、黄金一枚宛被下ケルハ、同シヤウナル武扁ト云驗也。去ハ、昔源平時分、一ノ谷ノ合戦ニ熊谷・平山ノ働モ前後ハ有ツレトモ、一、二ノ懸ト記置ケル所、今以同前タルヘシ。此旨思量仕給ヘ。

一 元和ノ比、福嶋左エ門大輔殿家頼、児小姓達ノ者ニ、竹中庄次郎ト云者アリ。此者或時、御供先ヨリ使ヲ被仰付ケルニ、狭箱ノ内ヨリ足中ヲ取出シハキテ走行ケルヲ大輔殿見給ヒテ、宿所ニ帰リ給ヒシ以後、彼庄次郎ヲ被召出、「若キ者ニハ奇特ノ心懸也」ト賞美仕給ヒテ、知行二百石給ヒシ。此庄次郎、勇氣盛ニ諸事ニ心懸、能奉公精ヲ出シケレバ、次第ニ立身シテ知行五百石被下ケルト也。然ルニ、同傍輩ニ来嶋左京ト云者、知行ハ七百石執テ力量勝人、指刀ハ長サ三尺五寸ノ刀ヲ指ケル故ニ、一家中面々皆此左京ヲ羨褒ヌ人ハナカリケル。然ルニ、此庄次郎、来嶋左京力器量ノ能ヲ妬ム心根出来テ、良モセバ詞ニテナリトモ恥辱ヲ与ヘン事ヲ巧ミ思ヒシトカヤ。或時、来嶋左京、彼三尺五寸ノ刀ヲ為磨ケルニ、左京自ラ行テ見物シテ居タル所ヘ、竹中庄次郎ガ草履取、



磨屋へ使ニ来テ、此刀ヲ見テ云ヤウ、「扱々無計方長イ刀哉。其刀ニテモ人が可被截カ」トアサ笑ケレバ、左京聞之、「身カ刀ニテ有ガ何ト人力被截ヘキカトハ悪キ奴カナ。誰カ者ソ」ト怒リケレバ、「御前ノ刀ト不存シテ僂忽ヲ申タ。御免アレ」ト云。左京腹ヲ立ケレトモ、磨屋種々佗言ヲ仕ケル故ニ、左京堪忍シテ帰リヌ。其後、庄次郎、左京二道ニテ行逢ケル時、庄次郎云ヤウ、「先日我ラ家頼慮外ヲ申タルニ、扱々能御堪忍アラレタリ」ト行違様ニ云シ故ニ、左京モ掛耳ニ心内ニハ無念ナコトニ思ヒシカトモ、可為ヤウモナク過シケルニ、其後、芸州広嶋ニテ、或浄土寺ニ談儀ノ聴聞有ケル時、竹中ハ先へ参リテ在シニ、来嶋跡ヨリ来リケルガ、竹中カ居タルヲ見ケル坎、脇僚へ立寄ケレバ、庄次郎ガ方ヨリ使ヲ遣シ、「爰元座中広ク御遠慮ナク是へ御越アレ」ト申遣ス。是左ナガラ我居タルヲ見テ脱タルト云ヌ計ナル使也。依之、来嶋ガ返答ニハ、「其元ニ御入ノ由ニテ御使過分ニ侍ル。少シ用事有テ是へ立寄侍ル。押付其へ参ヘキ」由ヲ云遣シ、頓テ本堂ニ行ケルニ、庄次郎、「左京殿被為出タ、彼へ御通アレ」ト云ヘハ、左京モ「唯今ハ御使過分ニ侍ル」ト、一礼ヲ云テ座ニ着ケル時、庄次郎ガ同道シテ来リシ窄人、庄次郎ニ向テ云ヤウ、「何ノ彼奴不構シテ置仕給ハテ」トツブヤキケレバ、左京、「是ヲ聞兼推参者」ト云テ、三尺五寸ノ刀ヲ引拔テ立上ル所ヲ、彼窄人一尺五寸ノ幅広ノ脇指ヲ拔テ、手離劍ニ打ケレバ、左京ガ真唯中ヲ罅本責テ打込タリ。夫ヨリ左京家頼七、八人刀ヲ拔テ切テ懸ル。庄次郎モ主従五人、庄次郎ハ薙刀ヲ以テ火花ヲ散シテ戦ケル。左京ガ小姓ト若党兩人ハ当座ニ死ス。其外、両方共ニ手負多シ。然ルニ、庄次郎ハ無難我家帰リ定テ討手ノ可向俣、人塚ヲ築テ可死者ヲト待懸タリ。其段太輔殿被成御聞、庄次郎ガ伯父何某ト云者ヲ召テ、「其方行テ庄次郎ニ切腹可為仕」ト被仰付ケル。伯父モ種々辞退セシカトモ不叶シテ行ケルニ、庄次郎聞之、「扱々御手前ノ顔見レバ中々腹ガ立。何シニ来給ヒケルソ」ト云ヘバ、「我

モ兎角ト辞退仕ケレトモ、可為様ナクシテ来リタリ。先我ヲ殺シ給ヘ」ト云ヘハ、「扱々人塚ヲ築テ死ナントコソ存知ツル物ヲ、無念至極ナルコト哉」ト云テ、腹抓切テ失シトカヤ。其後、庄次郎ト一所ニ取籠タル家頼八人、不殘成敗有シト云々。

誠ニ、此竹中庄次郎勇氣盛シニ、最心懸能男ト云ヘシ。常々足中ヲ所持スルコト善シ。去ハ、足中ハ駟走り、川越ニハ鞋ワラシヨリハ増タリト云ヘリ。古ノ名将織田信長公ハ、出陳ノ時分ハ每モ足中ヲ御陳刀ノ金尻コシリヨリ指通シ為持給ヒシトカヤ。或時、御前ニテ強ク働ケル武者ノ鞋ノ切テ難儀セシヲ御覽シテ、御褒美ニ被下ケルト也。其時、「御一生ノ御嗜ミ今度初テ御用ニ立タリ」ト御意有シト、將軍家譜ニ見ヘタリ（此武者、当御旗本被召出、金松又四郎殿ノ先祖ニテ即名ヲ金松又四郎ト云シトカヤ。其足中家ノ功勝者トシテ今ニ持伝テ有ト云々）。最有難御嗜ト云ヘシ。此庄次郎モ足中ヲ持タルニ依テ、心懸ノ能ヲ感シ給ヒテ、一旦ハ立身モ仕タリ。然ルニ、来島カ器量ト勝人家中ノ面々褒美スルコトヲ妬コト悪キ心得ナリ。尋常女コソ物妬ハスルモノナレ。女サへ賢女ト被云程ノ女ハ、嫉妬ノ念ハ無モノナルヲ、此庄次郎モ不学不智ノ男トシルヘシ。去レハ、勇謀有テモ不学不智ナランニ於テハ、如此瑕有ヘシキズ。惜カナ。物妬故ニ、其家中ニ秀タル来島ヲ殺コト先以不忠也。去ハ、源平ノ時分、駿州浮嶋カ原テ、梶原ガ云分ハ不忠、佐々木ガ謀言ハ忠第一也ト云リ。去ハ、其傍輩ノ中ニテ秀タルヲハ弥崇敬シテ諸人羨、其者ヲ似テ行儀作法迄モ善ナルコソ忠信第一トハ云ヘキ者也。又、庄次郎、我屋ニ帰リ取籠ケルコトハ、其時分世ノナラハシ時花者ナレハ、兎角ヲ可評ニ非ス。今ノ世ニハ其理ヲ人々能弁ケル坎。取籠ルト云コト、世ニ稀也。又、伯父討手ニ行シトコト、其時ノ品ヲ不聞難弁。去ハ、伯父討手ニ行テ品三ツアリ。同ク取籠カ、庄次郎ヲ引連テ立退ヌルカ、腹ヲ切セヌルカ、此三ツヨリ外ハアラシ。其内引連テ立退コト、我ハ善カランカト思所也。然レトモ、一概ニハ不可思。其時ノ様子ト品ニ依ヘシ。扱又、庄次郎ガ切腹以後、庄次郎トトモ

二取籠シ家来、不殘成敗仕給ヒシハ、法ニ過テ不当理シテ悪シ。主トトモニ一命ヲ捨テ取籠タル面々ニ何ノ咎カアラン。サレハ、御扶持コソ無カラメ。詞ニテハ賞美仕タランコソ主將ノ法トモ可云者歟。如此過法ヲ罰ヲ行コト天惡ミ給フ所也。法ヲバ法ニ行フ内ニ和有ヘキ者也。扱コソ大輔殿如此ノ行跡ニ依テ、自ら天ノ惡ヲ請給ヒ、終ニ果福ヲ失ヒ、子孫モ断絶セシ物歟。此旨量簡仕給ヘ。

一 最前モ書付侍ル御簾本ニ居給ヒケル大久保彦左エ門殿、或時、姫ヲ招給ヒ度被思ケレバ、先ノ名、名字ハ不覺、娘余多持給ヒシ人ノ所ヘ行給テ、四方山ノ物語仕給ケル次テニ、「扱何トカ思ヒ給フ、身ガ惣領ノ男子ニハ、最早姫ヲ取テモ能時分テアラズト存ルカ、何ト身カラガ所ヘモ娘ヲ御越者ガアラズカ」ト宣ヒケレハ、亭主ノ宣ヒケルハ、「御手前ヲ誰カ嫌フ者ガアラズ。大形大名トモモ下スト存ル」ト宣ヒケレバ、彦左、「身ガラニ誰カ下ス、虚言ナツイ①ソ」ト云ハ、亭主ノ云ク、「我モ娘ヲ余多持タリ。何レ成トモ一人連テタニ行給ハ、何々ノ誓文ゾ嬉シカラン」ト被言ケレハ、彦左微笑シテ、「夫ハ必定ニテ侍<sup>②</sup>カ」ト被云ケレハ、「愛宕<sup>③</sup>八幡モ御照覽アレ、無偽」ト宣ヒケレハ、彦左、「扱々満足仕タリ。左ダニ思召バ、ザツト濟侍ル。乍去御内儀ヘ御聞給ハン」ト宣フ。亭主、「イヤ女トモニ聞ニハ及ス。連テ行給ヘ」ト云ハ、「扱々満足シタリ。併御内室ノ如何思召レンモ不存。先御尋有テ給ハリ侍レ」ト云ハ、亭主奥ヘ入テ聞之、座敷ニ出テ云ヤウ、「女トモニ為申聞侍ル所ニ、御手前ノ左様タニ思召バ、是ニ過タル悦ナシト云侍ル」ト云バ、彦左モ喜悦仕テ身モ罷歸リ、「婆ニ為申聞テ悦セ侍ルヘシ」ト云テ歸リ給フ。夫ヨリ四、五日ヲヘテ、又彼仁ノ方ヘ行給テ、「婆ニ為申聞侍ハ、殊ノ外悦喜仕侍ル。扱、今日カ日柄モ善侍ル俣、連テ罷リ侍ルヘシ」ト云バ、其時亭主、「如何ニ心安トモ云ヘ、左様ニハ成間シク、未タノリ

『功名咄』五（下卷ノ上）

物ヲ一ツ不持」ト云バ、「貴殿ノ御内室古キ駕無ト云フコトハ有マシ。夫ニ乗テコシ給ヘ。扱乗物ガ為執度ト思給フナラバ、跡ヨリ拵テ越給ヘ。是非々」ト云ケレバ、御内室、「上着ノ一ツタニ不持シテ如何」ト宣ヒケレバ、「着ノ俣ニテ不苦、身力等<sup>④</sup>ガ方ニモ何ノ支度ヲモ不仕侍。早々」ト責給ヒケル程ニ、無是非被遣ケレバ、彦左伴婦テ吸物一種ニテ盃ヲ取替シ、「千秋万歳」ト祝テ埒明ケルト也。扱、翌日家頼ノ年老タル女ニ云コトニハ、「身ガ姫ハ何ト好姫ニテハ無力。汝ヲモ嘸満足ニアラズ。身力満足ヲ推量スベシ。姫御立テ為見給ヘ」ト宣フ。其時姫御立給バ、「勢モヨキ勢也。乍去、小袖ガ長シ。彦左カ姫ナトカ火事等トモ云時ニ倒ナトスレバ、ウロタヘテモ倒タルナント被云テハ外聞悪敷シ、是程ニ切給ヘ」ト云テ、小刀ヲ抜テツイ長ニ齧<sup>モツラ</sup>切給シト云々。誠ニ、昔人ハ如此物毎ニ輕ク行ヒ給ヒシニ依テ、財宝ニ余慶モ有シ。今時ノ武士ハ、万ツ分過行跡ニ依テ、日々ニ衰微スルコト勿論也。覺ハ思知ナガラ、分過ニハ成易ク、輕クハ難行。何トソ物毎ニ輕ク仕度者也。然ルニ、世間ニ金持ト被云程ノ者ハ、大形シハクシテ此風俗也。左有バトテ、シハクセヨト云ニハ非ス。毎事ニ輕ク安ク潔ク渡世度思フ所也。今ノ世ノ風俗ヲ見聞スルニ、不入所迄金銀ヲ飾、美麗ヲ好ヲ本意トス。扱、真実ヲ尋ル時ハ、敷金ヲ持テ来ル者ニアラサレバ、縁組ヲセズ。敷金ヲ持テ不来者ヲハ養子ニ不為如クノ心也。上部ハ結講ヲ尽ト云ヘトモ、底心ハ黒心事絶言語所也。唯、此彦左衛門殿ノ如ク輕ク安ク潔ク渡世度ト思フ所也。物毎輕ケレバ安ク、安ケレハ潔成易シ。此旨思量仕給ヘ。去ハ歌ニモ「慾故二人ヲモ世ヲモ諂ソ離ヤ放セ慾ト云モノ」。

①ツイ↓イ、(大)。②「侍」のあとの空白部分に「る」(大・金)。  
③岩↓宕(大・金)。④等↓等(金)、ラ(大)。

一 関ヶ原合戦ノ時分、於奥州上杉景勝、伊達政宗ト戦アリ。是ヲ長谷堂合戦ト云。其節、景勝ノ家頼ニ檜原越前ト云者、陳頭ニ進出、

政宗ノ備近ク乗寄、檜原越前ト云者也。「我ト思ン者アラハ出逢テ勝負ヲセヨヤ」トソ名乗ケル所ニ、政宗（○ノ備ニハ聞之下ト云ヘトモ、勝負ヲ計兼テ有シケル所）我軍勢ノ中ヨリ一人モ不出事無念ニヤ被思ケン、馬ヲ逸參ニ乗出シ、刀ヲ拔テ越前ニ渡相々打ニ打給フ所ニ、越前ガ甲ノ真甲ヲ額ニ引、目ノ付程割付タリ。越前ハ政宗ノ右ノ方ノケサンヲ二間切テ落シ、股半分程迄切込タリ。然トモ、越前ハ甲ヲ被打下、目モ不見、其上政宗駈出給フニ依テ、軍勢我モタト馳寄ケル故ニ、越前早々引退ケルト云リ。其後、世静テ以後、於武州江戸ニ檜原越前、伊達政宗ノ玄関ニ伺候シ、「檜原越前ト申者也。去ル長谷堂合戦ノ刻、御家頼衆ノ内誰ヤラン太刀打仕候コト侍ル。如何成仁ニテ侍ルソ。対談仕度侍ル」ト云ヘバ、政宗此段聞給ヒテ、「能コソ来レ、通シ逢給フヘキ」由ヲ宣フ。其後、書院ニ通シ、政宗出向テ宣フヤウ、「其節太刀打セシハ我也。如何シテ早ク引ケルソ。立所ニ危カリシ者ソ」ト宣フ。其時越前カ云ヤウ、「甲ヲ被打下眼不見。敵大勢馳来ケルニ依テ、引テ侍ル。屋形様ト存知成テ侍ハ、無ニ二指違、名ヲ後代可残者ヲ。扱々無念ニ侍ル」トソ云ケル。政宗、「今度対面ノ印ニ何ヲカ得サセン」トテ、長谷堂合戦ニ着シ給ヒケル鎧ヲ取出シ給ヒテケル。此鎧、則石<sup>①</sup>ノ方ケサンニ間、此越前カ切落シタルニテ候ケル。誠ニ、イカメシキ高名也。然トモ、陳頭ニ進出名乗コトハ、別シテ習有儀也。其故ハ、此越前ガ如クニ名乗コトハ、一円合戦ノ勝負ノ役ニ不立。自然被討タル時ハ、味方ノ弱リト成者也。唯自名ヲ貧ニアリ。又名乗ルト云所ハ、敵味方勝負ヲ計テ、不初合戦味方兵氣屈曲シテ、時刻ヲ移サバ必定負軍ト成ヘシト思フ時ニコソ、何家ノ何某ト名乗テ陳頭ニ進テ、勝負ヲ初ル時ハ其勇氣ニ被引、勝負初ル者也ト云リ。又、景清カ八嶋ノ磯ニテ名乗ケルハ、源氏ノ兵ニ怒シメ深入サセ、船中ニ射手ヲ揃テ射取ヘキ謀計也ト云リ。又ハ、如此一騎宛名名乗ナドシテ、化粧軍ヲ仕テ可移時謀スルコト有ト云リ。然トモ、此越前モ軍ニ勝タル兵ト云ヘシ。勇氣<sup>ウツク</sup>逞

シキ所不及云。又、政宗ノ主將太刀打ニ及給ニ、兵ノ不統コトハ、諸軍勢可為弓断之儀殊更近習ノ兵ノ不覺ト云ヘキ者歟。主其色アラバ、何ソ真先ニ進テ討死セサラン。但又、前ノ如クニアラスシテ敵進、我陳近ク乗寄、名乗コトアラハシタルク会尺テ可討取コト也。是ニ拔勢執勢ト云習アリ。能々思量仕給ヘ。

注 この割書部分は、本文「正宗」の右下に○印が付されており、その所に挿入する文である可能性が高い。金沢大学本は本文に繰り入れている。

① 右↓右（大・金）。